
とある科学とテストと召喚獣

黒龍

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

とある科学とテストと召喚獣

【Nコード】

N2842V

【作者名】

黒龍

【あらすじ】

バカとテストと召喚獣と

とある魔術の禁書目録を

混ぜて、オリキャラを出してみました！

オリキャラの名前は黒崎龍也！

基本原作通りだけどオリ展開あるかも！

初めての作品なので多少のことは見逃して！

注意！

この作品の主人公、

黒崎龍也はキャラが定まっておらずぶねぶねです

作品を読んでいく中で

あれ？キャラが違う？

となってしまうも

温かい目で見てください

プロローグ（前書き）

テストは歴史から数学に
変更しました

プロローグ

(眠い・・・)

これが最難関と言われる文月学園の振り分け試験か

(確かに難しい、だけど俺なら多少は解ける、だが・・・)

眠い・・・

(くそつ、徹夜が裏目に出たか・・・せつかく数学なのに・・・ダメだ、意識が・・・)

近くで誰かが倒れる音と

言い争う声が聞こえたが、俺は、夢の世界へ旅立った

俺らがこの文月学園に入学してから二度目の春が訪れた

三人の少年が走っている、制服を見ると同じ学校の生徒のようだ

「龍也！当麻！何で起こしてくれなかったの！」

「何度も電話したでしょうが！」

「俺は何度もドア叩いただろうが！」

「僕はそれぐらいじゃ起きないから！何のためにドアの鍵開けていると思ってるの！」

悪友の当麻と明久を連れて、走りながら玄関に向かう

「黒崎、吉井、上条」

『ん？・・・あ、鉄・・・西村先生、おはようございます』

すると、玄関に西村先生、もとい、鉄人が立っていた

「いま、お前ら『鉄人』と言わなかったか？」

『き、気のせいですよ』

「ところで黒崎、その懐のまた何か余計なものでも持ってきたか？」

彼の制服は所々ふくれている

「はい、そうです」

「またお前は、何度も言っているだろう、持ってくるなと」

「俺がこれを持ち歩かないのは、学校に先生がいないのと一緒にです」

「一緒か？」「一緒です」

「……まあいい、ほら、お前ら受け取れ」

「あ、クラス分けの……」

「一応言っておくが、
頭の良い奴はAクラス、
悪い奴はFクラスだぞ」

「俺達でも流石に間違えませんよ」

「そうか……実はな、
俺は今まで、お前たちは
馬鹿じゃないかと思っていたんだ」

「それは酷いですね」

そう言いながら、
三人揃って袋を破く

「喜べ、黒崎、吉井、上条」

そして、三人が紙を取り出す

「お前らは……」

『Fクラス』

「正真正銘のバカだ」

プロローグ（後書き）

作「と言う訳で、始めました！』とある科学とテストと召喚獣
「！」

上「タイトルおかしくね？」

作「他に思い当たらなかったただけだ」

吉「そういえば、とある側の口調もおかしいらしいよ特に一方通行」

作「だって口調難しいんだもん！」

上「まあいいや、とりあえず・・・」

『のんびりやりますがよろしく願いします』

主人公設定

名前 黒崎龍也 十六歳

身長 175cm

体重 58kg

趣味 物集め、改造、読書

特技 料理、速読

好きな物 本、甘い物、
小動物、

嫌いな物 虫、お化け屋敷

容姿 銀髪に鋭い目つき

だが、中々の美形
髪は腰まであり、
後ろで束ねている

イメージはこれゾンの相川歩

召喚獣 黒の改造学ランに

日本刀 腕輪 未定

家族構成

龍也 父 母 姉 兄 妹

(龍也以外、龍也が中1の頃から旅行中)

本作品の主人公

見た目は不良っぽいが

とても優しい

物を改造するのが得意で

バッテリーから爆弾を作れる

料理は大抵の物なら作れるかなりの甘党

英語は書けないが喋れる

基本的には人の後ろに立つ

普段は優しいがキレると

誰にも止められない

学園長と祖父は知り合い

木下姉弟とは幼なじみ

主人公設定（後書き）

こんな感じですよ

設定はまだまだ付け足します

設定その2

木下姉弟

生まれた時からの幼なじみで、親同士も仲が良かったため、いつも遊んでいた

中学は別になったが、

秀吉とは仲が良いまま

優子とは少し険悪

優子の趣味や生活態度の事は知らない

吉井明久

中学校二年生時代に会い、仲良くなった

一緒に喧嘩していたため

原作よりも喧嘩は強い

坂本雄二

何回か喧嘩したぐらいで

面識はとくになし

上条当麻

中学で喧嘩し、馬が合い、一緒に遊んでいた

もちろん、唐変木

御坂美琴

当麻と一方通行の幼なじみであり、

やっぱり当麻が好き

龍也や明久とも面識がある

一方通行

当麻や美琴の幼なじみで

中学は違つが仲は良かった龍也や明久とも面識がある

設定その2 (後書き)

こんな感じですよ！

サブタイトルって意外と考えるの難しいね(前書き)

俺の小説は漫画から書いているので

状況が分かりにくいところがあるかも知れませんが
気にしないでください！

サブタイトルって意外と考えるの難しいね

「よりによってFクラスとは」

「もう、当麻の不幸が乗り移ったんじゃないの？」

「上条さんの不幸に憑依機能は付いていません」

「やっぱり数学で寝たのが痛かったか」

そんな時、デカイ教室を見つけた

「なんだ？このバカデカイ教室は？」

「ここはAクラスみたいだね」

「デカイな、Aクラス」

三人で、窓から中を覗くと

「皆さん進級おめでとございます、私は、この二年A組の担任の高橋洋子です」

「なんてデカさのプラズマディスプレイ！」

「まずは設備の説明をします、ノートパソコン、個人エアコン、冷蔵庫

リクライニングシート、

その他の不備がある人は

「いませんか？・・・」

「すげえ、設備だな」

「では、クラス代表を紹介します、霧島翔子さん、前に来てください」

「・・・はい」

名前を呼ばれた少女は黒髪をなびかせて前に出てきた

「・・・霧島翔子です、よろしく願います」

「あの人が有名な霧島さんか・・・」

「美人だが、誰とも付き合わねーせいで女が好きだっつて噂だっけ？」

「Aクラスの皆さん、これから一年間・・・」

「やっば、じぶんのクラスにいかねーと！」

「わっ、急がないと！」

俺達はFクラスに向かって走る、後ろから高橋先生の声が聞こえる

「それでは皆さん頑張ってください、これから始まる『戦争』でどこにも負けないように・・・」

サブタイトルって意外と考えるの難しいね（後書き）

上「皆がまだ出ない」

作「次出ますから大丈夫ですよ」

吉「そういえば御坂さんは原作では中学生じゃなかったっけ？」

作「まあそこは成長させたり」

上「そうなのか」

作「ま、?????や?????は成長度合いは半端ないけどね」

上「ま、いいや、せーの」

『これからよろしくお願ひします』

話が進まない(焦) (前書き)

まだ出ない(焦)

話が進まない(焦)

「初日から遅刻してしまった」

「やばいな」

「いや、でも一年間一緒なんだし、明るく入ろう」

『すいませ〜ん、ちよつと遅れちゃいました〜』

「早く座れ！このウジ虫共！」

『台無しだッ！』

怒鳴った人物を見ると、

もう一人の悪友、

坂本雄二だった

「って雄二、何やってんの？」

「先生が遅れてるらしいから、代わりに教壇に上がってみた」

明久と当麻に続いて入ると言った

「先生の代わりって、

何で雄二が？」

「一応このクラスの責任者だからな」

「え？それじゃあ・・・」

「ああ、俺がFクラス代表だ、これで全員が俺の兵隊だな！」

（つてことは、雄二を説得すればクラスを動かせるな）

そんなことを考えていると後ろから声が聞こえた

「あ、やっぱりいた」

後ろを向くと茶髪の少女

御坂美琴が立っていた

「あ、御坂さん、おはよう」

「お、御坂、おはよう」

「おう、美琴、おはよう」

「おはよう」

ん？

「そういえば、何でここにいるんだ？Aじゃないのか？」

俺は疑問を口にしてみる

「う、それは・・・」

何か、嫌なことを思い出すように言葉を詰まらせた

「ああ、分かった」

当麻は御坂の頭に手を置いて言った

「試験、遅刻したんだな」

「・・・うん」

御坂は赤面しながら答える

そんな話をしていると後ろから、声が聞こえてきた

「おお、龍也ではないか、お主もFクラスだったのじゃな」

そこには男の娘、もとい、秀吉が立っていた

「お、秀吉、秀吉もFか」

「そうじゃ、ちなみに姉上はAクラスじゃ」

「・・・何で優子が出てくんだよ」

ちなみに木下姉弟と龍也は幼なじみである

「別にいいじやろ、そもそもお主らは・・・」

秀吉が何かを言おうとしたら

ガラッ

扉が開いて誰が入って来た

そこにいたのは、

白い髪と赤い目が印象的な男子生徒だった

話が進まない(焦)(後書き)

上「やっと美琴が出てきたな」

作「やっぱり短いのかなあ？」

吉「そうだね」

作「次はもうちょい長く
してみようと思います」

感想をお待ちしております

なんとか出せた(前書き)

遅くなってすみません！

なんとか出せた

「一方通行……」

「なんだってアイツが……」

「……『無敗無傷』」

周りの生徒が驚く

「……チツ」

近くの席に着くとそのまま寝てしまった

「何でアイツがいるんだ？」

一方通行の学力はAクラス並みのはずだ

「まあ」

「そうなるわな」

「え？何でか分かるのか？」

「ああ」

「どっせ」

「「振り分け試験サボったんだろ（でしょ）」」

なんか納得できた

「えー通してもらえますかね」

先生が来た

「それと席に着いてください、HRを始めますので」

先生が教壇に立つて

自己紹介を始めた

「えーおはようございます、二年F組担任の・・・」

先生は一度、黒板の方を向いて、チョークが無かったので、またこちらに向いた

「福原慎です、よろしく
お願いします」

（ ）（ ）チョークすら、用意
されてないのか（ ）（ ）

衝撃だった

「えーでは、設備の説明をします、卓袱台、座布団、不備があれば
申し出てください、なお、必要な物があるなら極力自分で調達
してください」

何このAクラスとの雲泥の差

「では、自己紹介でも始めましょうか、廊下側からの人からお願いします」

すると廊下側の秀吉から

自己紹介が始まった

「木下秀吉じゃ、演劇部に所属しておる、今年一年よろしく頼むぞい」

秀吉の紹介が終わると次の生徒を先生が呼ぶ

「一方通行君・・・一方通行君？いないんですか？
・・・いるじゃないですか」

起きた一方通行は渋々席を立つ

「・・・チツ一方通行だアア、余計なことをしなければ、何もしねエ」

それは余計なことをしたら何かすると言うことか？

そして、一方通行が座ると次の生徒が立つ

「・・・土屋康太」

「お、康太じゃないか」

「相変わらず口数少ないね・・・そういえばこのクラス男多いね」

「学力最低クラスともなると女子はいないのかね？」

明久とそう話していると、女子特有の高い声が聞こえてきた

「……です、海外育ちで日本語は読み書きが苦手です」

「お、御坂以外の女子の声」

「趣味は吉井明久を殴ることです」

「誰ッ！」

恐ろしくピンポイントな

趣味を持つ奴に明久は振り返った

「ハロハロ〜、吉井、

今年もよろしくね」

あれは島田じゃねえか、

アイツもFクラスだったんだな

「次は上条君、よろしくお願いします」

「あっはい、え〜つと、

上条当麻だ、よろしく」

「次は御坂さん、よろしくお願いします」

「はい、御坂美琴です、

よろしくお願いします」

「御坂さーんッ！」

「結婚してくれーッ！」

叫ぶ男子共

「ごめんなさい」

謝る御坂

「えーっと、次は黒崎君、お願いします」

次は俺だ、やりにく！

「えーっと、黒崎龍也だ、数学と物理が得意で英語が苦手だ、趣味は・・・」

ドサドサッ、

制服の中からペンチ、

ニッパー、ハンマー、

ボール、ナイフなど様々な道具が落ちてくる

「・・・物集めです、よろしくお願いします」

・・・

「次はお前だぞ、明久」

不穏な空気を断ち切り明久に言った

「あつ、本当だ」

そして、元気よく立ち上がり答える

「吉井明久です、気軽に

『ダーリン』って、呼んで下さい!」

いや、そんな事、言う奴いるわけ……

『ダアアアリイーン!』

……いたよ、気持ち悪いな、明久もそう思ってた
みたいで

「………忘れて下さい」

と、苦笑いで言っていた
そんな時

ガラッ

戸が開かれた

「あの……遅れて、すいま……せん」

息を切らせて、一人の女子生徒が入って来た

なんとか出せた（後書き）

作「やっと出せた」

上「本当にやっとだな」

吉「まだ姫路さんが出てないけどね」

作「そうだね、わたくし的には、とあるメンバーをどう出そうか、悩んでいます」

上「そうか、インデックスとか、どうすんだ？」

作「そこはもう決めて、あるんだ」

吉「そうなんだ」

作「うん、僕はね木原とか魔術メンバーとかをどうするか、悩んでいるの」

上「まあ、言いたい事はあるがとりあえず、一人称を統一しろ」

作「これが作者クオリティ（キラッ）」

上「黙れ」

ゴスッ

作「いてえなこのやるうー!やんぞゴリアアアア!」

上「こっちこそ、やってやんよオオオ!」

ゴシヤアアアアツ!

吉「え〜長くなりましたがこれからこの作品をよろしくお願いします」

『死ねええええ!』

吉「まだやってるよ・・・」

早くもサブタイトルのネタがない(前書き)

感想キターーーーーー\ (^o^) / ー!!!

早くもサブタイトルのネタがない

「丁度、自己紹介しているところなので、あなたも
お願いします」

少女は赤面しながら答えた

「はッはい！あ、あの、

姫路瑞希と言います！よ、よろしくお願いします！」

そう言うと生徒の一人が手を上げた

「はいつ！質問です！」

「あ、は、はい！何ですか？」

「えーっと、何でここにいるんですか？」

その言葉を皮切りに周りがざわつく

「姫路って入学テストで、学年二位だろ？」

「それにいつも順位一桁

じゃないか・・・あと可愛い」

どうでもいいことまで

混じっていた気がする

「そ、その・・・試験の

最中に高熱を出してしまいました」

試験の途中退席は0点扱いである

「ああ、なるほど、俺も熱（の問題）が出たせいでFクラスに……」

「ああ、科学だろ？アレは難しかったな」

「俺は弟が事故に遭ったと聞いてそれどころじゃ……」

「黙れ、一人っ子」

「前の晩、彼女が寝かせてくれなくて……」

「今年一番の嘘をありがとう」

流石Fクラス、バカばかりだ

「でっでは、一年間よろしくお願ひしますッ！」

「姫路さん可愛いねえ」

明久がうつとりした顔で言う

「そっだな」

「き、緊張しましたあ」

姫路が俺の左前に座り、

明久が声をかけようとする

「あの、姫路さ「姫路」」

そこに雄二が入る

明久は頭を抱え込み、
泣いていた

「はっはい！何ですか？
えーっと？」

「坂本だ、坂本雄二」

「あ、姫路です」

明久は何とか入れる場所がないか、探していた

「もう、体調は大丈夫なのか？」

明久は何とか入れる場所を見つけ、姫路に声をかけた

「あ、それは僕も気になる！」

「よ、吉井君！？」

姫路はとても驚いたようだ

「明久がブサイクですまん」

フォローになっていない

「そ、そんな！目もパツチリしていて、顔のラインも細くて綺麗だし……」

その、むしろ……」

まあ、悪くはないか……雄二もそう思っていたみたいで

「まあ、悪くはないか……そういやあ明久に興味がある奴がいた気がするな」

「え？だ「そツそれってだれですかッ!？」」

姫路が身を乗り出して聞くさっきの言動と合わせると……なるほどな

「確か久保……」

明久と姫路がドキドキしながら聞く

「……利光だったかな」

久保利光（性別ノ）

「明久、さめざめと泣くな」

俺は膝を抱えて泣いている明久に出来るだけ優しい言葉をかける

「……あ、あれ？」

姫路が突然現れた俺に驚く

「ああ、俺は黒崎龍也だ、よろしく、明久とは親友だ」

「あ、姫路です」

パンパンっ

「はいはい、その人、
静かに・・・」

バキィ、バラバラ

軽く叩いただけで教卓が
壊れた

「え〜、替えを用意してきます」

動じないってすごいな

「あはは・・・」

姫路もこんな環境じゃ

キツイだろうな

そんなとき

「・・・雄二、ちょっといい?」

「あ？」

明久と雄二が廊下に出ていった

早くもサブタイトルのネタがない(後書き)

作「感想キターー！ー！

(ゴロゴロゴロゴロッ

ガシヤアアアアアン！

ジタバタジタバタ)」

上「うるさい」

吉「よほど嬉しかったんだろうね」

作「ねえねえねえ、当麻に明久！来たんだよ！感想が！しかも二件も！」

上「わかったわかった」

作「本当にありがとうございます！未方掌覇さんに火水 総さん！参考にさせていただきますと思います！」

(あ、でも、垣根くんは、もう決まっています！すいません未方掌覇さん)

小萌センサー達はちゃんと出しますよ！」

上「急に真面目になったな、まあ、こんな風に」

吉「感想がくるとテンションがあがってこんな感じになるのでよろしく願います」

作「テンションをあげすぎて、天井に頭ぶつけちゃった」

上「感想お待ちしております」

吉「あ、質問もお待ちしてますよ」

とあるメンバー設定（前書き）

とあるメンバーの設定を
書き忘れていたので
書きました

とあるメンバー設定

上条当麻

召喚獣

黒学ランに右手に龍の形をした赤い籠手

腕輪

『紅龍の顎』

籠手から龍の顔が出てきて相手の召喚獣を喰らう

得意科目

現代国語、数学

苦手科目

英語、保健体育

御坂美琴

召喚獣

常盤台の制服に刃の付いたヨーヨー

腕輪

『超電磁砲』

コインを使い、雷撃を放つ

得意科目

科学、数学

苦手科目

物理、現代国語

一方通行

召喚獣

白と灰色の服に杖型の

トンファーとハンドガン

腕輪

『解放』

杖と銃が無くなり、

瞬間的に動けるようになる

得意科目

物理、数学、英語

苦手科目

なし

とあるメンバー設定（後書き）

作「すいません！今日は

ちょっと忙しくて更新出来そうにありません！」

上「今日はすいませんが

これで失礼します」

吉「また、明日になりますますがよろしくお願いします」

開戦宣言？（前書き）

昨日すいませんでした！

開戦宣言？

俺は廊下の明久達の会話に耳を傾ける

「……『試召戦争』」

「Aクラス相手……」

「……姫路のためか？」

なるほど

ガラッ

「俺抜きで、何楽しそうなことを話しているんだ？」

二人がこっちを向く

「……龍也、さっきの話」

「ああ、聞いていたよ、
ダメだったか？」

「いや、好都合だ、俺も
そうしようと思っていた
所だ」

雄二は教室に戻りながら
答える

「世の中学力がすべてじゃないって証明したくてな、いい作戦も思いついた」

「……です、よろしく」

「坂本君、君が最後ですよ、クラス代表でしたよね、前に出てきてください」

「了解」

雄二が教壇に立つ

「Fクラス代表の坂本雄二だ、代表でも坂本でも好きなように呼んでくれ」

そして、雄二はクラスを

眺める

卓袱台、畳、ガラス、

みんなもつられてそっちを見る

「……Aクラスは冷暖房完備の上に座席はリクライニングシートらしいが……不満はないか？」

『大ありじゃあッ!』

周りに一斉に声を上げる

「だろう？俺だって不満だ」

「いくら安いからってこの設備はあんまりだ！」

「Aクラスだって同じ学費だろ！ひどすぎる！」

「そこで代表からの提案だ俺たちはAクラスに対し『試召戦争』を仕掛けようと思う」

周りがざわつく

「そんなの勝てるわけがないだろ？」

「これ以上設備を落とされたらどうなるんだ？」

「姫路さんがいたら何もいらない」

その言葉を聞き、

雄二がたくましい胸を張る

「そんな事はない、

必ず勝てる、いや、俺が勝たせて見せる」

「そう言われても、何の根拠もないしなあ・・・」

周りはため息をつく

「根拠ならあるさ、それをいまから説明してやる」

そう言うと雄二は姫路の席に目を向ける

「おい康太、いつまで姫路のスカートを覗いているんだ」

「・・・ッ!」

バツ、ブンブン!

「はッはわッ!?!」

姫路はスカートを押さえる

「土屋康太、こいつがあのある有名な『寡黙なる性職者』ムツツリーニだ」

その瞬間クラスがざわめく

「馬鹿な、奴がそうだというのか?」

「見る、まだ証拠を隠そうとしている」

「ああ、ムツツリの名に恥じない姿だ」

「あのおう、黒崎君、土屋君って有名なんですか?」

姫路が聞いてきた

「知らないほうがいいよ」

それを俺は笑顔で諭す

「姫路の実力は皆知っているはずだ」

「おお、確かに」

「彼女なら、Aクラスに
引けをとらない」

「彼女さえいれば、何もいらぬ」

誰だ？さつきから姫路に
ラブコールしているのは？明久が怒ってるじゃないか

「それに一方通行だっている」

「あの『無敗無傷』がこのクラスに！」

「確か、Aクラスレベルの成績だったっけ」

「・・・チツ」

舌打ちしちゃったよ、
褒められるの慣れていないんだね

「そして、上条当麻に御坂美琴だっている」

「あの『幻想破壊』」

（イマジンプレイク）も！」

「御坂さん、結婚してくれ〜」

「ごめんなさい」

あきらめてなかったんだな

「それに木下秀吉もいる」

「ワシもか？」

「演劇部のホープ！」

「確か、姉がAクラスに」

ああ、優子か

「当然、俺も全力を尽くす」

「そう言えば、坂本って、小学生の頃、神童って呼ばれてなかったか？」

「じゃあ坂本も体調不良だったのか？」

「おいおい、Aクラスレベルが四人もいるのか！」

「そして黒崎龍也は知っている奴は知っているな、

こいつが『最終兵器』

(ラストバトラー)だ!」

別に言う必要はないのに
なあゝ

「なッ! 『最終兵器』 たど!」

「『悪鬼羅刹』

『無敗無傷』

『幻想破壊』

『最終兵器』

四天校勢揃いじゃないか!」

「これはいけるんじゃないか!?」

周りの士気が一気に上がるおお、いいんじゃないか?

「それに吉井明久もいる」

しーん、士気が一気に
下がる

「僕の名前は才子扱いか! せっかく、上がった士気が台無しじゃないか! …… ってなんで僕を睨むのさ」

「誰だっけ、吉井明久って」

「明久、不憫な」

「そうか、知らないなら
教えてやる」

雄二は明久を指差して
答える

「こいつの肩書きは・・・『観察処分者』だ！」

四天校

数年前……

ある、それぞれの中学校に……

最強の四人がいた

その者達はそれぞれの
力を持ち、最強を名乗っていた

その者達の名は

すべてを薙ぎ払う

豪腕の『悪鬼羅刹』

攻撃が当たらない

不死身の『無敗無傷』

すべてを破壊する

一撃必殺の『幻想破壊』

そして・・・

すべての戦いに勝利する

最強の『最終兵器』

そして・・・

隠された四天王

鬼の守護物

『黒神妖妃』

雷撃の姫

『超電磁砲』

不死身の守護神

『最終注文』

そして・・・

隠れた強者

『龍ノ右翼』

四天校（後書き）

作「昨日はすいませんでしたー！ー！ー！ー！ー！ー！ー！
（ズザアアアアアアアア！スライディング土下座）」

上「ほら、土下座はいいから謝りなさい」

作「本当に申し訳ありませんでした、リアルがちょっと忙しくて」

吉「それでは、本題に入ります」

上「いきなりだな、まあ、いいけど、この隠された四天王ってなん
だ？」

作「ネタバレがイヤなので言いませんがしばらくすれば分かります、
もちろん作中に出てくる人物ですよ

『黒神妖妃』の名前は出るかどうか心配ですけれど
・・・」

上「お時間が来てしまいましたので今日はこの辺で」

吉「また次のあとがきで

お会いしましょう」

感想と質問お待ちしております

観察処分者（前書き）

今日は短めです

観察処分者

「……それって『バカの代名詞』じゃなかったっけ？」

「ちッ違つよ、ちょっとお茶目な十六歳の愛称で……」

「そつだ『バカの代名詞』だ」

「肯定するな！バカ雄二！」

「あの、それってどう言うものなんですか？」

姫路は首をかしげる

知らなさそつだもんな

おつと、話が進んでいた

「……気にするな！いてもいなくても変わらん雑魚だ」

どうやら罵倒中らしい

放っておくか

「とにかくだ！俺達は力の証明としてDクラスを落とそつと思つ」

雄二は机を叩きながら言う

「皆、この境遇は不満だらつ？」

『当然だ！』

「ならば全員筆を執れ！
出陣の準備だ」

『おおー！』

「俺達に必要なのは卓袱台でわない！システムデスクだ！」

『おおー！』

「おツ、おー！」

雄二は本当に人を操るのがうまいな、姫路までやってるし

「明久にはDクラスの死者をやってもらう、明久、大役を果たせ！」

「え？」

台に肘をついていた明久が言う

「・・・下位勢力の使者って、大抵酷い目に遭うよね」

「大丈夫だ、騙されたと思っ
て逝ってみろ」

「本当に？」

「もちろんだ、俺を信じろ」

「分かったよ、それなら
使者は僕がやるよ」

周りから声上がる

「がんばれよ」

「お前なら出来る」

「ああ、頼んだぞ」

皆、明久の背を見送る

「……まさか、最後まで字が違うことに気づかねエとはなァ」

一方通行がぽつりと呟いた

観察処分者（後書き）

作「早速で失礼ですが、
一週間ぐらい書き溜めに
入ります」

上「本当にいきなりだな、なんでだ？」

作「これからしばらく
忙しくて書けそうに
無いからです」

吉「ちゃんと帰ってくるの？」

作「忙しいって言っても
感想の返信ぐらいは出来ますから大丈夫です」

上「では、まじめな回に
なってしまいましたか」

吉「一週間後まで失礼します」

作「予定よりも速く帰って来るかもしれませんが、
それでは・・・」

『また、来週〜〜』

宣戦布告（前書き）

お久し振りです！

宣戦布告

明久が特攻して十分

「騙されたあつ！」

明久がボロボロになりながら飛び込んで来た

「こつ殺される所だった」

「やはりそうきたか」

酷いな、おい

姫路が心配してくれているよかったな明久、
とそこに島田が来た

「吉井、本当に大丈夫？」

島田も心配しているよう・・・

「良かった・・・まだウチが殴る余地はあるんだ・・・」

前言撤回

「そんなことより今から
ミーティングを行うぞ」

ひでえな、明久固まってんじゃねーか

雄二、秀吉、姫路、御坂
島田、一方通行、土屋、
当麻、明久、俺の順番で
教室から出る

「災難だったな、明久」

「まったくだ、今度は俺もついて行ってやるよ」

「ありがとう、当麻、龍也」

「何やっているの、ほら」

吉井、アンタも来るの!」

戻って来た島田が明久を立たせる

「あーはいはい」

「返事は一回!」

親子か!

「・・・一度、

Das Brechen、えーっと、日本語だと・・・」

「調教」

「そう!調教の必要がありそうね」

「せめて教育とか指導って言えないのか?」

流石につっこむ

「というか、ムツツリーニどうして『調教』なんてドイツ語知ってるの？」

「………一般教養」

なんて嫌な教養なんだ

そんな話をしながら階段を登ると屋上についた

屋上の扉を開く、その隙間から光が差し、目を細める

「明久、宣戦布告はしてきたな？」

雄二が地面に座りながら

聞く

「一応、今日の午後に関戦予定と告げてきたけど」

「じゃあ、先に昼食か？」

「そうなるな、明久、

今日ぐらいはマトモな物を食べるよ」

「そう思うなら、パンでもおごって欲しいんだけど」

「えっ？吉井君ってお昼

食べない人なんですか？」

違うんだな〜それが

「いや、一応食べてるよ」

「・・・あれで食っていると見えるのか？」

「何が言いたいのか、龍也」

俺が言おうとすると雄二も重ねて言った

「お前の主食って・・・塩と水だろ？」

「それは食べるとは言わねえよ」

「『舐める』が正解じゃろっな」

明久にあたたかい目を送る

「まっ、飯代まで遊びに

使い込むお前が悪いよな」

「しつ仕送りが少ないんだよ！」

ウチの仕送りより多いくせに・・・

「・・・あの」

そんなとき、姫路から声が上がった

宣戦布告（後書き）

作「お久し振りですーっす！」

上「お久し振りです」

吉「お久し振りです」

作「うん、早速で悪いけどすいませんでしたーっ！休載中遊んでいましたー」

上「っておい！書き溜め

全然してねえじゃねえか！」

吉「本当だ！白紙のまんま！」

作「すいませんでした！

色々事情が・・・」

上吉「言い訳無用！」

作「ギャアアアア・・・」

ピンポンパンポーン

しばらくお待ちください

上「で、なんでだ？」

作「ちょうど試験がありまして」

吉「あ、そうか、だから」

上「いや待て、試験は休載した二日目にはもう終わっているぞ」

作「……………」

上「……………」

吉「……………」

作「すいません！」

アキバズトリップしてました！」

上「なんでだ？」

作「ちょうど試験が終わったあとに貸して貰ったんで……………」

上「ゲームばかりにかまかけてちゃんと更新しなさい！だから……………ガミガミガミガミガミガミガミガミガミガミ」

吉「まだまだ説教が続きそうなのでまた明日会いましょう」

感想、質問いつまでも

待ってます

死亡フラグの設立(前書き)

すみません、遅れました！

死亡フラグの設立

「……その、良かったら私がお弁当を作ってくださいませんか？」

と、姫路、健気だね〜

「え？本当にいいの？」

「はい！迷惑じゃなければ……」

「迷惑なもんか！ありがとう！姫路さん」

「……ふ〜ん瑞希って

優しいのね、吉井『だけ』に作ってくるなんて

だけ、を強調して言った

「あ、いえその、皆さんにも……」

「俺達にも？いいのか？」

雄二が確認をとる

「はい、迷惑じゃなければ」

「楽しみだな〜女の子の

手作り……」

「なんでこっちを見るのよ」

「楽しみじゃのう」

「それじゃあ、皆に作ってきますね」

優しいな、姫路は・・・

そういえば一方通行はどこだ？話に参加してねえし

俺は一方通行を探して見る

あ、いた、弁当食ってる

何してるかと思えば・・・

弁当を覗くと可愛らしい

弁当箱に可愛らしく

盛り付けられたおかず

女の子が作ったのかな？

ん？紙が入っている

『今度パフェを食べに連れて言ってくれたら嬉しいかもってミサカはミサカは

お願いしてみたり』

打ち止め（ラストオーダー）よりって書いてある

懐かしいな、元気かな？って、うわあ、すっごい
嬉しそうだな

「愛されてるね」

「ッ！・・・ためエ！

見てンじゃねエよ！」

一方通行が殴りかかって来た

「おっとつと」

「テメエ」

あらら、目がイッてらっしやる

「おゝい、何してんだ、

話の続きをするぞ」

「・・・ああ、今行く」

「・・・チツ」

渋々、雄二達の所に戻る

「さて、話を戻すぞ、

試召戦争についてだ」

「そついやあなんでDクラスなんだ？Eでもいいと思うが？」

「ああ、色々理由はあるが戦うまでもない相手だからだ」

「え？でも僕らより上の

クラスだよ？」

「試験の時はな、周りの

面子をよく見てみる」

明久は周りを見ながら答える

「えーっと、天才が一人と美少女が三人、バカが四人ムツツリが一人いるね」

天才（一方通行）、

美少女（姫路、秀吉、御坂）バカ（俺、雄二、当麻、島田）

ムツツリ（土屋）だろうな

おっと、話が進んでた

「『さつきの話』Dクラスに勝てなかったら意味がないよ」

廊下の話か・・・

「負けるわけないさ、

お前らが俺に協力してくれるなら勝てるさ

いいか、お前ら、ウチの

クラスは・・・最強だ」

「面白そうじゃねえか」

「Aクラスの連中を引きずり落としてやるかの」

「が・・・頑張りますっ」

「そうか・・・それじゃあ作戦を説明しよう・・・」

死亡フラグの設立（後書き）

作「やつほう！遅れちまったZE！」

上「真面目に話せ」

作「実はね、五時まで

iモードが繋がらなかったんだ」

吉「本当？」

作「電源を一度切ったら

直った」

吉「良かったね」

上「じゃあ明日は頑張ってたね」

作「明日こそは速く更新を！」

感想質問、

いつまでもいつまでも

お待ちしております・・・

開戦！（前書き）

モブの名前は適当です

開戦！

俺は寝ていて、

受けていなかった

数学と物理を受けていた

試験を受けているのは

俺と一方通行と御坂と姫路

作戦は俺達が試験を受けている間に明久達が前線を維持する、要は時間稼ぎだ

ガガガガガガガガッ！

「黒崎君、少し静かにしてください」

「無理っす」

ガガガガガガガガッ！

「そこまで！」

「よし、あがり！」

先生にプリントを提出してFクラスに向かう

「おう、終わったぜ！早速行くことと思うんだが、いいか？」

「最初っからそのつもりだ行ってこい！」

「OK」

俺は早速Dクラスに向かう

「邪魔者は殺しますッ！」

うおッ！ビックリした・・・って明久！

「明久危ねえッ！サモン！」

科学

清水美春 31点

VS

黒崎龍也 82点

俺の召喚獣は改造学ランに日本刀を持っていた

清水を難なく倒す

「島田さんとの戦闘が思いの外、効いていたのか！」

俺は近くにいた島田に声を掛ける

「島田も大丈夫か？」

「助かったわ黒崎・・・
本当にありがとう」

島田は清水を指差し答える

「西村先生！早くこの危険人物を補習室へ！」

こうして清水は物騒な事を叫びながら補習室に引きずられていった

「吉井」

「島田さん、お疲れ！一度戻って回復試験、受けてきなよ」

「吉井・・・」

ヤバイな、怒りのオーラが見える

「須川、こっちに来ておけ」

「分かった」

「さあ、皆！戦争はまだまだこれからだ」

「吉井ッ！」

「はひいッ！」

島田は明久の肩を掴み言う

「・・・ウチを見捨てたわね？」

「……記憶にございません」

……

「死になさい！吉井明久！サモ……」

「須川、行けッ！」

「了解！」

須川は島田を羽交い締めにする

「落ち着け！吉井隊長は
味方だぞ！」

「違いわ！コイツは敵！
ウチの最大の敵なの！」

目の血走り方がハンパないな

「須川、早く連れて行ってやれ」

「了解」

「こら、放し……殺してやるんだからーッ！」

明久、頑張れ

「さ、さあ皆！秀吉達が補給をしている間、前線を維持するんだ！」

「させるな！一気に攻め落とせ！」

双方の音が響く

「吉井隊長！横溝がやられた！これで布施先生側は残りは二人だ！」

「五十嵐先生側が、俺しかいない！援軍頼む！」

「藤堂がやられそうなんだ！助けてやってくれ！」

チツ、予想以上に厳しいな

「布施先生側は防御に専念五十嵐先生側は総合科目の人と効率良く交代して勝負を！藤堂君は……」

「俺が行く！」

俺は藤堂の所に向かう

「藤堂！助けに来たぞ！」

「サンキュー黒崎！」

科学

咲元信介 32点

VS

黒崎龍也 78点

藤堂健介

8点

「よしッ！明久の所に向かえ！」

「分かった！」

「・・・そこは、大丈夫、先生達に流すんだ、他の場所に向かってくれるように」

「・・・なるほど、それは確かに効果的だ」

須川と明久が何か話している

「よし、内容は任せてくれ確実に騙してみせよう」

「うん、よろしく！」

「おう、明久、大丈夫か？」

「あつ、龍也、こっちは大丈夫だよ」

「そうか、藤堂の科学はもう無理だ、他の場所にまわせ」

「分かった・・・さあ、

僕らは多対一の状況を心がけて行こう！」

『了解！』

開戦！（後書き）

作「すいませんでした！」

上「次は何でだ？」

作「お盆って・・・忙しいね（遠い目）」

吉「で、遅れたんだ」

作「親が深夜まで飲み明かすし、携帯のバッテリーが切れてアアアア！何て事もあったし」

上「ドンマイ」

作「番外編も書いているんで更に遅れるかもしれない、どうか、あたたかい目で見てください」

これからもよろしく
お願いします

ネ、ネタがない・・・(前書き)

サブタイトルのネタがない(TOT)

ネ、ネタがない……

キンコーンカーンコーン

「塚本、このままじゃ埒があかない！」

「もう少し待て！今、船越先生を呼んでいる！」

船越先生（45歳 独身）を

呼んだのは立会人になってもらうためか、
これ以上戦線を拡大されるとフォーロー出来ないな

ピンポンパンポーン

『ご連絡いたします、船越先生、船越先生』

この声は須川か……なるほど、いい作戦じゃないか

『吉井明久君が体育館裏で待っています』

へ？

『生徒と教師の垣根を越えた、男と女の大事な話があるそうです』

ああ、明久死んだな

「吉井隊長！……あんた男だよ！」

「違う！違うんだよ！」

「あんな確固たる意志を持っている奴らに勝てる・・・？」

「Dクラスまで!？」

「絶対に勝つぞ!吉井隊長の死を無駄にするな!」

『おおッ!』

大丈夫かな？

「隊長、いけますよ!この勢いで押し返しましょう!」

「……………」

「…………隊長?」

「……………」

「す?」

「須川あああッ!」

やっぱり…………

「工藤信也、戦死!」

「西村雄一郎、総合残り
40点です！」

「森川が戻って来ない！
やられたか!？」

十九人いた部隊も残り六人・・・そろそろ明久も限界だろうか（精神的な意味で）

「明久！龍也！」

遠くから雄二の声が聞こえてきた

「もう少し持ちこたえろ！」

「雄二！当麻！」

「援軍だ！合流する前に
全滅させる！」

次々と仲間が倒されていく

「残り三人！」

チツ、こっちにもきた

「黒崎覚悟！サモン！」

「なんの！サモン！」

科学

井上堅一 49点

VS

黒崎龍也 46点

きついな・・・

ブシューウウウツ!

「うおっ!なんだ?」

煙?・・・消火器か!

「だああッ!」

ガッ プシャアアアアア

明久が消火器を天井のスプリンクラーに向かって投げた

「待たせたな!Fクラス

上条、行くぜ!サモン!」

科学

井上堅一 41点

VS

黒崎龍也 36点

上条当麻 82点

「チエストオオオツ！」

当麻の召喚獣が相手をぶっ飛ばした

「くっ、ここは退くぞ！
遅れるな！」

「深追いはするな・・・
よし、一旦戻るぞ」

ネ、ネタがない・・・（後書き）

作「皆さんこんばんはっば〜黒龍お兄さんだよ」

上「きもい」

作「ひどい！（TOT）」

吉「まあまあ、落ち着いて」

作「（っ　っ）じじじ」

もうネタがないからこっちも頑張っているんだよ

上「その顔文字もネタの
一種か？」

作「そうだよ！

（っ、っ、）っ」

上「きもいからすぐにやめい」

作「（。　。　。）ええっ！

上「止めるって言ってんだろっが」

作「これが作者クオリティ（　　）キラリ」

上「うるせええええッ！」

作「やんのか、

ゴラアアアアッ!

「、、」

吉「またやってるよ・・・えーっと、感想質問、
お待ちしております」

上「なかなか、やるじゃねえか」

作「お前もな」

吉「あ、仲直りしてる」

決着！（前書き）

しゅ、宿題が終わらない！

決着！

「無事なようだな、明久、龍也」

「まあね」

「まあな」

「さあ、戻って部隊を立て直すぞ」

俺達は教室に戻って科学の回復試験を受けた

「にしても当麻、きついな前線は」

「そのようだな」

「・・・そうだ、さっきの校内放送聞いたか？」

「ああ、バッチリ、

って言うか、雄二が指示していたし」

「・・・マジ？」

「マジ」

「だったら、そろそろ・・・」

「シャアアアア！」

明久が包丁を持って雄二に襲いかかった
・・・死人を出されても
困るな

「あ、船越先生」

「ちいッ！」

バタンッ！

明久が掃除用具入れに隠れた、・・・って言うか
どうやったなら空中でバツクダッシュできるんだ？

「すまん、龍也」

「気にすんな」

「さて、そろそろ行くか」

もう下校時間か、確かに
頃合いだな

「おっしや！Dクラスの首獲ってやるぜ！」

「」「おうッ！」」「」

「あー、明久、船越先生が来たってのは、嘘だ」

バンッ！

「キシヤアアアツ！」

新生命体になった明久が
雄二を追う

「取り囲んで多対一の状況を作るんだ！」

雄二の指示が飛ぶ

「『Dクラス、塚本、
討ち取つたり！』」

おっ、塚本を討ち取ったか

「援護に来たぞ！」

「Dクラスの平賀だ！」

「ついに動き出したぞ！」

「Fクラスは全員、一度
撤退しろ！」

うっわ、きついな

ん？平賀の周りに近衛部隊がない、
冷静になった明久もいる、よし、行くか

「明久、行くぞ」

「うん」

「向井先生！Fクラス
黒崎（吉井）が……」

「Dクラス玉野美紀、
（白星優花）、サモン！」

古典

玉野美紀 72点
白星優花 69点

VS

黒崎龍也 59点
吉井明久 35点

「チッ！あと少しなのに」

「ははっ、何を言うかと
思えば近衛部隊がいなくてもお前らじゃ無理だ！」

「確かに僕らには無理だろうね……だから」

「姫路、頼むぜ」

「は？」

「あ、あの……」姫路が平賀の肩を叩く

「え、Fクラスの姫路です……えっと、お願いします」

「え？あ、はい」

平賀、現状を理解してないな、まあ仕方がないか

「え、えっと・・・サモンです！」

現代国語

平賀源二 129点

VS

姫路瑞希 339点

「え？・・・あ、あれ？」

「い、ごめんなさいッ！」

姫路の召喚獣が平賀の召喚獣をなぎ倒した

決着！（後書き）

作「宿題が全く手付かずなのでやろうと思います」

上「どのくらい掛かりそうだ？」

作「どんなに少なく見積もっても一週間」

吉「じゃあ更新できないね」

作「うん、だから今日は
少し話します」

作「あれ？アクセス数とか見られんだ、
とって見てたわけよ、そし
たらね

P V 9 6 7 4

(。 。 ;)

飲んでた水吹いた

いやいやまさかもうすぐ

一万越えるなんて思わなかったな

越えたら木原クンの話でも作ろうかな？」

作「という話です」

上「ずいぶん話したな」

吉「じゃ、そろそろ終わるよ」

感想質問待ってます・・・て言っかマジで質問は
ください、しばらくしたら使っんで

その後（前書き）

PV 10000突破！
ユニーク 2000突破！

その後

Dクラス代表

平賀源二

討死

『うおおおおッ!』

「すげえよ!本当に勝てるなんて!」

「そんな、バカな・・・」

座り込む、平賀

「チツ、遅かったかア」

「あっちゃあ、遅かったな」

「うっ、瑞希ずるい」

一方通行と当麻と御坂が
遅れてやって来た

「遅かったな、一方通行、当麻、御坂」

「もちつと、早く来るべきだったなア」

「残念だっ」もげるように痛い痛いッ!』

『おい、誰かペンチ持ってきてくれ』

なんだ？ペンチなら持つてるけど

「さっきの放送の件かもな」

なるほど、そういうことか

「というか、ペンチで何を」

『・・・生爪・・・』

なるほど

「確か、設備は交換しないだっけ」

「ああ、目標はAクラスだかなア」

じゃ、どういう交渉をするのかな？

『・・・Bクラスの室外機』

『ああ、設備を壊せば教師に睨まれるかもしれないが悪い取引じゃないだろ』

『こちらとしては、願ってもない提案だが、いいのか』

雄二と平賀の声が聞こえてきた

「・・・ってことは、
次はBクラス戦だな」

「そうだな」

「さて、皆！明日は点数の補給テストを行うからな、解散！」

「よし、俺らも帰るか」

「おっっ」

「あア」

「はあ、あんまり活躍できなかったな」

「そうだなア」

「仕方ないか・・・明日もテストだし、勉強でも・・・あ」

「どうした、龍也？」

「教科書、卓袱台の下に
置きっぱだった」

「アホ」

「先に帰ってくれ」

「うーい、じゃあな」

「おう」

「ん？明久、どうした？」

「・・・ああ、龍也、」

「ちよつと教科書を忘れちゃて」

「俺と一緒にか・・・なんだ元気がねえな」

「まあ、ちよつと、色々あってね」

「そうか、まあ、」

「じゃあまた明日」

「うん、じゃあね」

ガラッ

「ん？姫路？」

「く、黒崎君！？」

俺が教室に入ると姫路が
机に向かって何かを書いていた

「どどどどどど、

したんですか！？

あっあの、これはっ！」

「落ち着け、姫路」

「こっこれはですねっ！

そのっ！えっと・・・

ふあっ！？」

ドタッ！ ヒラッ・・・

舞ってきた紙にこんなことがあった

『吉井明久君へ

あなたのことが、好きです』

.....

「姫路」

「ひゃッ！はい！あの、
これは……」

「頑張れよ」

「……はい！」

「じゃあな」

俺みたいになるんじゃないぞ

その後（後書き）

作「お久しぶりで〜す」

上「お久しぶりです」

吉「お久しぶりです」

作「で、早速ですが、
終わりませんでした！」

上「問題用紙ほぼ白紙じゃねえか！」

吉「うわ〜」

作「ま、そんなことは置いといて」

吉「置いてて、いいんだ」

作「

PVが10000を突破しましたので
木原くんの作成に入りますそしてユニークが2000突破
しました！

新しく番外編を考えます！

ここで〜っ」

上「なんだ？」

作「木原くんの出番がもつと早くなりそうです
という訳でアンケートを
取りたいと思います」

吉「アンケート？」

作「ああ、木原くんを先に出すか番外編で出すか」

吉「感想に『先に出す』

『番外編で出す』って

書いてくれれば、
ありがたいです」

作「では時間が余ったので三日前にコミケに行った時の話をします

(現在 2011年 8月24日)

夏休み前から情報を

手に入れていた

俺は朝に会場の

ハーモニーホールに向かった

(作者は熊本県民です)

だが、24時間テレビと

被ってしまったハーモニーホールは24時間テレビの旗や看板で埋
め尽くされていた

俺は一度そこで帰った

本当にあるのかな？

と思いつながら・・・

そして友達を連れまた

ハーモニーホール向かったそこで会場に入って楽しみました！」

上「全く中身のない会話
ありがとう」

作「それではまた会いましょう」

上「スルーかよ」

まだまだ感想をお待ちしております！

懐かしき人との再会（前書き）

初めての朝投稿！

（つゝ、ゝ）

懐かしき人との再会

Dクラス戦の翌日

「おはよー」

昨日の疲れが出たのか少し寝坊してしまった
確か今日はテストだったなあ・・・だるい

「おう、龍也もギリギリだな」

「おはよう雄二、俺も、

って言うことは他にもギリギリの奴がいたのか？」

「ああ、明久がな」

「なるほどな」

『イヤアアアアア！』

明久が叫びながら、教室を出ていった

「明久は災難だな」

「そうだな」

いつの間にか来ていた当麻が言った

「あ〜、やっと終わった」

四教科連続テストはきつい

「うむ、疲れたのう」

「おう秀吉、今日はポニーテールか」

「そうじゃ、いいじゃろ」

髪をいじりながら、

話す秀吉

・・・もう十年以上

一緒にいるのに女にしか
見えない

「龍也も髪が長いからの、ツインテールなどは、
どうじゃ?」

くしと鏡を持って

満面の笑顔で言う秀吉

「いや、遠慮しとく」

さすがにそれはきつい

「よし、昼飯でも食いに行こうか」

「俺達も行くか」

当麻と一方通行も来た

「俺達も行くか、よし、

今日はラーメンとカツ丼とカレーとチャーハンにするか」

「相変わらず、よく食うな、俺は何にしようかな」

俺は・・・チャーハン

にしようかな

「じゃ、僕は贅沢にソルトウォーターでも・・・」

塩水が贅沢って・・・

「あ、あの皆さん・・・」

立ち上がった、

学食に行こうとしたら姫路に声をかけられた

「え、えつと・・・お、

お昼なんですけど、その、昨日の約束の・・・」

「あ、弁当か？」

「は、はい、迷惑じゃなかったら」

姫路が後ろに隠していた
バックを出しながら言う

「迷惑なもんか！

ね、雄二！」

「ああ、そうだな、
ありがたい」

「そ、そうですか？
よかったです」

羨ましいな〜俺なんか・・・

「むー・・・瑞希って、
意外と積極的なのね・・・」

島田が親の敵のように明久を睨んでいる

う〜ん、女子の気持ちは
よく分からない

「折角だし、屋上で食うか？」

「だったら、先に行っていてくれ」

「ん？雄二はどこかに行くの？」

明久が聞く

「飲み物でも買ってくる
昨日の礼も、かねてな」

「あ、じゃあ、ウチも行く！」

と、島田が言う

「悪いな、それじゃたのむ」

「おっけー」

雄二は、了承し二人で売店へ向かう

「じゃ、俺達も行くか」

「そうだな」

俺、明久、当麻、一方通行秀吉、御坂、姫路、
ムツツリーニは屋上にむか・・・

「ん？」

「どうしたの龍也？」

「悪い、先に行っていてくれ」

俺は懐かしい人物を見つけたのでそいつを追っていった

「……久しぶりだな、
優子」

俺は久しぶりに会った
幼馴染を呼ぶ

「ーッ！……龍也、
久しぶりね、中学の入学式以来かしら？」

「そうだな」

「相変わらず、バカやっているようね、いろいろ聞いているわよ」
「朱に交われば赤くなるだま、俺は元々朱なのかもしれないがな」

「『神童』って呼ばれていた時が懐かしいわね」

「……昔の話々」

「……それで何の用？
わざわざ呼び止めた訳が
あるのかしら？」

「別に理由なんてないさ
ただ、久しぶりに見たから声をかけただけさ、じゃあな」

「待って、Dクラスを倒したみたいだけど設備を交換しなかったんですってね

何か理由があるのかしら？」

「・・・さあな、代表様のご意向だ、俺ら兵士は戦うだけさ」

そして、俺は屋上に向かうために優子から目を逸らし歩き出す

・・・やっぱり可愛くなっていったな、やば、ますます諦められなさ
そうだな

龍也は顔の赤さを
見られないように階段に
向かって走り

・・・・・・凄く、
かっこよくなっている
じゃない
うわあ、顔が熱い・・・

「優子、どうしたの？
顔赤いよ？」

「……………//」

「優子？」

「……はっ！い、いや！何でもないわ！」

「こっちもこっちで顔を赤くしていた」

懐かしき人との再会（後書き）

黒龍さんがログインしました

上条当麻さんがログインしました

吉井明久さんがログインしました

作「

こんにちは

こんばんは

おはようございます

黒龍です

えーっと、全く宿題が終わってないのに明日キャンプ（という名の日帰り海水浴）があります」

上「上のあれはスルーなのか」

吉「今回のネタじゃない？」

上「なるほど今回はチャットか・・・っていうか

YouTubeの実況動画で同じあいさつを見たことがあるんだが・・・」

作「だって 神さん大好きなんだもん！」

吉「まあ、僕も好きだけどね、死 さん」

上「はいはい、本編について語れ」

作「ちえー、・・・にしても初々しいね、

あの二人は「

上「そうだな、まるで誰かさんみたい・・・」

吉「なんで、僕を見るのさ」

上「ま、いいや」

作「これからくっつきそうできっつかないもどかしい感じで書こうとは思いますが」

上「もどかしいな、それは」

作「じゃ、ここでネタバレ実は龍也は・・・」

黒崎龍也さんがログインしました

黒「今、何か俺について話をしようとしなかったか？」

作「イエエ、メッソウモゴザイマセン」

黒「じゃあ、いいけど

絶対に話すなよ」

黒崎龍也さんがログアウトしました

作「地獄耳ですね〜じゃあやめておきましょう」

上「さらっと、ネタバレしようとするのはやめてくれ」

作「じゃあ、最後に
アンケートの期日を言います、期日は後、3話投稿したら終了です
あ、ちなみに最後に名前を出す予定なので、
名前をだすのが嫌な方は
匿名希望と書いて送ってください、何も書かれてない場合は名前を
出します

現在は

先に一票
後に0票

まだ一票 (。。(;

じゃんじゃんお待ちしております」

全「それでは、皆さん、
さようなら」

黒龍さんがログアウト
しました

上条当麻さんがログアウトしました
吉井明久さんがログアウトしました

あとがきには誰もいません・・・
あとがきには誰もいません・・・
あとがきには誰もいません・・・

戦争で人を多く殺したのはなんだと思う？（前書き）

それはね『毒』だよ

戦争で人を多く殺したのはなんだと思う？

「ふう、追い付いた」

「遅かったのう、龍也」

「まあな、気にすんな」

ガチャッ

屋上の扉を開ける

「天気が良くて、
何よりじゃな」

「そうですねー」

姫路はビニールシートを広げる

「人もいなくて、貸切状態だし日差しと風が気持ちいいねー」

「そっだな」

俺はシートの上に足を投げ出す

「あの、あんまり自信はないんですけど」

姫路は重箱の蓋を開ける

『おおっ！』

俺らは一斉に歓声を上げた

凄く旨そうだ、

定番のメニューが重箱の中に入っている

「すごいよ、姫路さん！

塩と砂糖以外の物が入っているよ！」

「それが普通だ」

「よ、喜んでもらえて良かったです……」

「じゃ、雄二には悪いが

俺は先にエビフライを……」

「あ、ずるい龍也」

「………（ヒョイ）」

「あ、ムツツリーニ」

俺が食おうとした

エビフライをムツツリーニ食われた

「………（パクっ）」

ボタン ガタガタガタガタ

エビフライを食った

ムツツリーニが

豪快に後ろに倒れ、

小刻みに震えだした

「わわ、土屋君!？」

姫路が皆に渡そうとした

割り箸を落とす

「……………(ムクリ)」

ゆっくりとムツツリーニは起き上がった

「……………つ、土屋君？」

「……………(グッ)」

「あ、お口に合いましたか？良かったです」

多分『凄く美味しい』と

言っているんだと思うが

俺にはK O寸前のボクサーにしか見えない

「皆さん、どんどん食べてくださいね！」

と言う姫路に気付かれないように小声で会話をする

『さっきのムツツリー、どう思った?』

『……どう見ても演技には見えない』

『だよ、不幸だ……』

『ダメだ、当麻が壊れた』

『……(ダッ!)』

『一方通行、逃亡!』

何と言うことだ、一瞬で

戦力が三人も減った!

『明久、龍也、お主ら身体は頑丈か?』

『正直、自信はない』

『俺もだ』

『ならば、ワシが行こう』

『やめろ、危険すぎる』

『そつだよ、』

秀吉危ないよ!』

「大丈夫じゃ、
ワシは胃が頑丈なんじゃ、ジャガイモの芽程度なら
食ってもびくともせん」

秀吉つて、

意外と丈夫なんだな、

あれ？ジャガイモの芽って毒じゃなかったっけ？

そんな感じで冷や汗を

流していたら

「おう、待たせたな！」

雄二が来た

「へー、こりや旨そうじゃないか、どれどれ・・・」

止める間もなく

素手で卵焼きを口に放り込む

「あ！雄二！」

明久が叫ぶ、

だが、時すでに遅し

パク

バタンガシヤガシヤ

ガタガタガタガタ

ジュース缶を

ぶちまけながらぶっ倒れた

「さ、坂本!？」

遅れて島田が来た

「ちょっと、

どうしたの!？」

・・・間違いない、

コイツは本物だ・・・

すると、雄二は視線で

訴えてきた

『お前ら、毒を持ったな?』

『これは、姫路の実力だ』

俺は首を振る

「あ、足が・・・」

つってな・・・」

雄二は優しい嘘をつきながら何とか起き上がる

「ダッシュで階段登り降りしたからじゃない?」

「そうだな」

言い訳をしたが島田はまだ不満顔だ

「そうなの？坂本って充分鍛えられてると、思うけど？」

く、何も知らない島田を

弁当から逸らすのは無理か？

「あ、島田さんをその右手をついているあたりでさ、さっき虫を潰しちゃったんだよね」

「ええッ！早くいつてよ！」

「ごめんごめん、とにかく手を洗ってきた方がいいよ」

明久！ナイスだ！

「そうね・・・ちよつと

行ってくる・・・」

「島田はなかなか、食事にありつけずにおるのう」

「全くだな」

アハハハハハハハ

『明久！今度はお前がいけ！』

『む、無理だよ！僕だったらきつと死んじゃう！』

『ワシもさつきまでの、
決意が鈍ってくるわい……』

『雄二が行きなよ！』

姫路さんは雄二に食べて
もらいたいはずだよ！』

『そうか？ 姫路は明久に
食べてほしそつだが』

『そんなわけないよ！』

龍也は乙女心がわかってないね！』

『お前にだけは言われたくない！』

『本当だな、わかってないのは、お前……』

『ええい、往生際が悪い！』

「ああ、姫路さん、あれは何だ！？」

「え？なんですか？」

『おらあつ』

『もごああッ！？』

姫路の気を逸らした明久は雄二の口に弁当を突っ込んだ

『「ご飯はよく、噛みましよう！」』

ちよつと、待つてね

『ふう、これでよし！』

『お主存外、鬼畜じゃな』

雄二、全身ビクビクしているが大丈夫か？

「ごめん、見間違いだつたよ」

ずっと、何かを探していた姫路に声を掛ける明久

・・・こんな古典的なのに引つかかる姫路、
大丈夫か？

「あ、そうだつたんですか」

「お弁当美味しかったよ、「馳走」

「いい腕だつたぞ、姫路」

とりあえず、話を乗る

「あれ？もう食べちゃったんですか？」

「うん、特に雄二が

『美味しい美味しい』って凄い勢いで

「そうですか、うれしいですっ」

姫路は明るく言う

「いやいや、こちらこそ

ありがとうございます、ねっ雄二？」

「う・・・うう、

あ、ありがとうございます・・・

姫路・・・」

やばい、目が虚ろだ

「あ、美味しいと言えば

駅前に新しい喫茶店が・・・」

「ああ、洋菓子が評判の店だな」

また、作ってくるとか

言われる前に話を逸らす

「あ、そうでした」

ぞわぁ・・・

「実はですねー、デザートもあるんですよ」

俺達は生き延びることが
できるのか・・・

戦争で人を多く殺したのはなんだと思う？（後書き）

黒龍さんがログイン

されました

吉井明久さんがログイン

されました

上条当麻さんがログイン

されました

雑談

作「イイイイイイ

ヤツホオオオオオ!

ひっさしぶりいいいい!」

上「（無視）あれ？また、

チャット風だな」

吉「（無視）前回やって、
気に入ったみたいだよ」

作「ハブられても
めげないZE!」

上「心強いな」

作「現在もたまにハブられる」

吉「悲しいね」

作「だが、空気を読まずに突っ込んでいくZ E!」

上「今日は随分テンションが高いな」

吉「感想が久しぶりに

いっばい来て嬉しいらしいよ」

作「D E!いきなりだが、

俺メガネ男子になったぜ!」

上「本当にいきなりだな、ってメガネ男子?」

作「似合う?」

(黒いメガネを掛けて)

上吉「全然」

作「くばあ!」

上「私服も黒だから、

真っ黒だな」

作「・・・分かっているよ、俺にメガネが似合わないってことぐら
い、

どうせ学校に行っても
ちよつと珍しがられて
終わりだろうな」

吉「はいはい、

落ち込まない落ち込まない」

作「復活！」

上「立ち直り早いな」

作「立ち直りの早さには
定評があります」

吉「どのくらい早いの」

作「喧嘩した相手と5分で仲直りできる」

上吉「早っ！」

やっと本編に入ります

作「というわけで、
どうでした？」

吉「ざっくりだね」

上「そういえば、美琴は？」

作「N A I S Y O」

上吉「うぜえ！」

作「ま、その辺は置いて」

アンケート

作「現在の投票状況

先に出す 2票

後に出す 0票

まーだ、一票(、(

まだまだお待ちしております」

最後に

上「それでは最後に」

吉「これから学校が始まるので更新がさらに遅くなります」

作「それでは！」

全「また、次の感想で
お会いしましょう」

作「これ似合う？」

(黒い帽子に黒いメガネに黒い服装)

上吉「全然」

作「……………ぐすん」

黒龍さんがログアウト
されました

上「あ、逃げた」

吉「じゃ、僕達も」

上吉」「おようならっ」

上条当麻さんがログアウトされました
吉井明久さんがログアウトされました

あとがきには誰もいません・・・
あとがきには誰もいません・・・
あとがきには誰もいません・・・

■最近はYouTubeよりニコニコ派(前書き)

お久しぶりです

最近はYouTubeよりニコニコ派

「ああッ！姫路さん、アレはなんだッ!？」

「明久！次は雄二でも、きつと死ぬ！」

俺は明久を止めると、
明久に雄二が詰め寄った

『すまん龍也、明久！
俺を殺す気か!』

『この任務は雄二にしか
出来ない！ここは任せませ!』

『馬鹿を言っな！そんな
少年漫画みたいな笑顔で
言われてもできん!』

『この意気地なしッ!』

『そこまで言うなら、
お前にやらせてやる!』

『なっ、何する気!』

『お前の鳩尾に拳を
打ち込んだ後、存分に口に詰め込んでやるわ!』

『いやああああああ！
殺人鬼iiiiiiiiiii！』
くっ！どうする？明久や
雄二に詰め込むわけには
いかない、そうだ！

俺は明久達に近づく

『俺が行こう・・・』

『龍也！？無茶だよ！
死んじゃうよ！』

『俺のことは率先して犠牲にしたよな！？』

雄二の声が飛ぶ

『ふっ、後は頼んだぞ
(姫路のごまかしとか)』

『龍也・・・本当に大丈夫か？』

『大丈夫だ、問題ない』

『龍也！それは死亡フラグ・・・』

『どうかしましたか？』

『あっ、いや』

「何でもないぞ！」

「あ、もしかして・・・」

姫路の顔が曇る

バレたか！？

「ごめんなさいっ、スプーンじゃないと、食べにくいですよね、
・あれ、一緒に持ってきたのに」

デザートはヨーグルトの
ような物だった

確かに箸じゃ食べにくい

「教室に忘れてきちゃったみたいですが、取って来ますねっ」

ドアに姫路が向かう

周りが安堵の息を吐く

「さて、この間に食って
おくか」

俺はフタを開ける

「ごめん・・・ありがとう」

「すまん・・・恩にきる」

「別に死ぬわけでもないし大丈夫だろ」

「そ、それもそうだね！」

「ああ龍也、頼んだぞ！」

「頼むぞ、龍也」

「……（コクコクッ）」

みんな応援してくれる
グロッキーになっている
当麻を除いて

「じゃ、頂きます」

俺は容器を傾け、一気に
かきこむ

「……なんだ、意外と
普通じゃなゴばあっ！」

また一輪、花が散った、
命という、儂い花が

「……雄二」

「……なんだ？」

「……さつきは無理矢理食べさせてコメン」

「・・・わかってもらえたならいい」

その頃、御坂は屋上のドアの前にいた

「トイレに行っていて、よかった」

「・・・美琴」

「おうわ！・・・一方通行じゃない、どうしたの？」

「学食に行くかア？」

「・・・そうね、行くつかしら」

「・・・生きてるって
幸せだなア」

「まさか、あんたから
その言葉を聞くとは思わなかったわ」

最近はYouTubeよりニコニコ派（後書き）

黒龍さんがログインされました

上条当麻さんがログインされました

吉井明久さんがログインされました

雑談

作「はい、お久しぶりです」

上「なんか、ずいぶん

テンションが違うな」

吉「うん、いつもなら

『ひっさしぶりいいい！』って言いそうなのに」

作「宿題が結局終わらず

現在、国語の宿題の小説を書いています」

上「大変だな」

作「だけでも、テンションを上げて行くぜええええ！」

吉「あ、戻った」

作「ってなわけで、全然
投稿出来なかった理由は

サブタイトルと同じく

ニコニコ動画ばかり見てました!」

吉「だめじゃん」

作「『組曲』と『七色』と『流星群』ばかり見てました、やっぱりっぺいといじとタツオンは最強です!

他の曲なら eroyAKや oromもいいです!」

上「はいはい、その話はいいから」

アンケート

作「残すところ、後一話ですいつ投稿するかは俺の空き時間しだい!」

吉「出来るだけ、早く投稿してね」

作「それでは」

全「さようなら」

黒龍さんがログアウト

されました

上条当麻さんがログアウトされました

吉井明久さんがログアウトされました

このあとがきには誰もいません・・・
このあとがきには誰もいません・・・
このあとがきには誰もいません・・・

作「と見せかけての
ジャジャジャ、ジャーン！」

黒龍さんが乱入してきました

作「二人は帰りましたが俺は話すぜ！」

作「次回のあとがき予告
俺のリア友が出演します

（本編じゃないですよ！

あとがきですよ！（）」

作「それではこの今度こそさようなら」

黒龍さんが退散しました

このあとがきには誰もいません・・・

このあとがきには誰もいません・・・

このあとがきには誰もいません

作戦会議（前書き）

はい、皆さんこんばんは

活動報告にも書きましたがやっと外泊許可が出たので現在家で書いています

作戦会議

「そういえば、坂本、次の目標なんだけど」

何とか復活した俺達は

作戦会議をしていた、

当麻も現世に戻ってきて、一方通行と御坂も学食から戻ってきた
島田は不満顔だが逆に感謝してほしい、だが、世の中には知らない
方が良いこともある

「試召戦争のか？」

「うん（ぐづううう）」

「島田、腹が減っているならこれでも食っとけ」

俺はポケットからカロリーブロック（チョコ味）を
取り出して島田に渡す

「ありがとう、黒崎」

「・・・・・・・・・・」

「なんだ明久、そんな目で見てもやらんぞ」

さっきはお前も食わなかったからな

「でき、相手はBクラス
なの？」

島田は食べながら、質問を続ける

「ああ、そうだ」

「そういえば、最終目標はAクラスじゃないのか？」

俺は何度も聞いてみる

「正直に言おう、

どんな作戦でもウチの戦力じゃ勝てやしない」

雄二らしくないな、まあ、確かにAクラスのトップの十人は本当にヤバイからな

「どんな、作戦でも、代表を倒せない限り勝利はない」

「じゃあ、最終目標は

Bクラスに変更なの？」

「いいや、そんなことないAクラスをやる」

「??????」

明久の頭に？が増える

「・・・雄二、

もうちよつと分かりやすく説明してくれ」

「あ、すまん、クラス単位では勝てないと思う」

だから一騎打ちに持ち込むつもりだ」

「なるほどなア」

一方通行は気付いたみたいだが俺にはさっぱりわからない

「一騎打ち？どうやって？」

「Bクラスを使う」

・・・あ、なるほど

「明久、下位クラスは負けたらどうなるか知っているな」

ビクッ

「え！？えーつと・・・」

こりゃ知らないみたいだな

『吉井君！下位クラスは

負けると設備を一つ

落とされるんですよ』

「つまりBクラスなら、

Cクラスの設備になるわけだ」

「常識だろ、明久」

流石の俺でも知っている

「・・・では、上位クラスが負けた場合は？」

「悔しい！」

「龍也、ペンチ」

「ほらよ」

俺は雄二にペンチを渡す

「ややっ！僕を爪切り要らずの身体にする動きが！」

「相手クラスと設備が入れ替わるんですよっ？」

姫路のフォローが入る

「そうだ、そのシステムを利用して交渉する」

「交渉なんぞに応じてくれるかね？」

「Fクラス設備よりはマシだろう、負けたらCランク設備になるだけだしな」

「なるほど」

「それをネタにAクラスと交渉する」

学年二位クラスとの連戦、何の得もないAクラスは嫌がるだろうからな

「じゃがそれでも問題があるじゃろう、そもそも一騎打ちで勝てるのじゃろうか？」

「それに関しては考えがある、心配するな、とにかくBクラスをやるぞ」

ま、考えがあるならいいが

「そこで明久」

「ん？」

「今日のテストが終わったら、宣戦布告をしてこい」
「断る、雄二が行けばいいじゃないか」

「やれやれ、それならジャンケンで決めないか？」

「ジャンケン？」

何か企んでるな

「OK、乗った」

「よし、ただのジャンケンじゃつまらないし、心理戦ありでいい」
「ああ、なるほど」

「わかった！ジャンケン
じゃあ僕はグーを出すよ！」

「そうか、それなら俺は
・・・」

雄二は一呼吸置いて

「お前がグーを出さなかったら、ブチ殺す」

何その心理戦・・・

「行くぞ！ジャンケン・・・」

「わあああッ！」

パー 雄二

グー 明久

「さあ、行ってこい」

「絶対に嫌だ！」

まあ、ほとんど脅しだからな

「Dクラスの時みたいに
殴られるのを心配しているのか？」

「それもある！」

「それなら今度こそ大丈夫だ、保証する」

どうせ、また罫に嵌める
んだらうな

まっすぐな目で雄二は明久を見る

「なぜなら、Bクラスは
美少年好きが多いらしい」

「そっか、それなら確かに大丈夫だねっ」

どこがだ！

明久は顔は整っているが
美少年ではないと思う
癒し系って感じかな？

「でも、お前不細工だしな・・・」

溜息混じりに雄二が呟く

「失礼な！365度、
どこからどう見ても美少年じゃないか！」

5度多い・・・

「5度多いぞ」

「実質5度だなア」

「一周回って5度だな」

「一年と混ざったんだな」

上から、

雄二、一方通行、当麻、俺

「四天校のみんななんて、大っ嫌いだ！」

明久はそう叫ぶと階段に
向かって走り出した

「とにかく、頼んだぞー」

雄二のその言葉で昼食は
お開きになった

作戦会議（後書き）

作「はい、皆さん

こんにちは、黒龍です

リア友を出す予定でしたがそんな暇がなかったので、いつも道理のメンバーと別のメンバーで雑談にします」

吉井明久、上条当麻、

黒崎龍也、坂本雄二、

一方通行さんが入室しました

坂「始めてきたな、あとがきには」

一「俺もだア」

黒「俺は二回目だ」

上「まあ、それはいいだろう」

吉「うん、本当に」

作「今は外泊許可が出たから家で話しているが明日には病院に戻らなければいけない」

吉「ちなみに何の病気なの？」

作「虫垂炎」

上「虫垂炎？」

坂「盲腸のことだ」

作「初日は痛みが激しすぎて動くことも出来なかった次の日の昼まで点滴だけで過ごしたから空腹だった」

上「それはキツいな・・・」

作「まあ、いい次の更新の時には退院しているだろうそれでは、アンケートの結果だ」

先に出す 2票

後に出す 0票

作「という訳で木原くんは先に出すことに決定しました！

投票してくださった

神のような皆様

未方 掌覇様改め

未元 定規様

則次 火焰様

本当にありがとうございました！」

全『それではさようなら』

退院しても特に皆気にしない(前書き)

お久しぶりです

退院しても特に皆気にしない

「……言い訳を聞こうか」

午後のテストも無事終了し放課後

明久はBクラス生徒の

暴行で千切れかけた袖を

手で押さえながら

雄二に詰め寄った

「……予想道理だ(だア)」「」「」

「くきいー！殺す！

殺しKILL！」

「落ち着け」

「ぐふあっ！」

雄二の拳が明久の鳩尾を
強打する

「先に帰ってるぞ、明日も午前中はテストなんだからあんまり寝てるじゃないぞ」

雄二は爽やかに言い残して教室を出ていく

「うう……腹が……」

「大丈夫か？」

俺は明久に駆け寄る

「ううゝ龍也の裏切り者ゝ」

「はいはい、肩貸してやるから」

俺は明久を持ち上げる

「………ん？」

明久が見た方を見ると姫路が鞆を抱え込んで
キョロキョロとあたりを
見回している、
かなり拳動が不審だ、

……ああ、そついやあ
昨日手紙書いていたつけ、ま、いいや

「行くぞ、明久」

「うん」

見るのもいけないと思い
俺は明久を連れて教室を
後にした

翌日

「皆総合科目のテスト、
ご苦労だった、午後
Bクラスとの試召戦争に
突入するが殺る気は充分か？」

『オオooooooooooooッ！』

「前線部隊の指揮は姫路にとってもらっつ」

「が、頑張ります！」

『ウオオオオオオオッ！』

キーンコーンカーンコーン

「よし、行って来い！目指すはシステムデスクだ！」

こうしてBクラス戦が始まった

退院しても特に皆気にしない(後書き)

作「皆！久しぶり！退院したぜ！」

上「おう、やっと退院したか」

吉「てか、退院して一週間経っているけど？」

作「うん、それはね・・・」

上「まで、スルーをスルーで返されたらどうしようもない」

作「ゴメンゴメン、

ちよつと、イラツときちやって」

吉「別にいいけど何で遅れたの？」

作「実は退院した後、色々あってね、活動報告すら出来なかったんだ」

上「そうなのか」

作「ああ、それに退院して四日目に体育祭の練習が

あつて体力も戻ってないのに走らされた、

しかも、応援練習つてのがあつて声が出ていなきゃ

全力疾走＋腕立て伏せ50回と言う盲腸再発させる気か！的な運動をさせられた

土日は筋肉痛で全く動けなかった」

上「そりゃきついな」

作」と言う訳で今日投稿しました、
今日はこの辺で失礼します」

『おれおれなら〜』

番外編 とある作者の作品戦争（前書き）

ついカッとなってやった

（、・・・、）

だが、後悔はしていない！（、・・・）キリッ

ついでに反省もしていない！（、・・・）キリッ！

カオス度マックスですが
見たい人は見てください

（つ、、）つ

番外編 とある作者の作品戦争

「ふあゝ」

俺の名前は諸事情により

明かせないがとある学校に通う高校二年生だ

・・・さて、今日は何を

しようかな？

って言うか学ランはまだ

暑いなゝ

そう思いながら家に帰ろうと昇降口を出ると

「すみません、ちょっと

いいですか？」

すぐ傍に中学生らしき男子生徒がいた

紺色のブレザーに赤色の

ネクタイをしている

「・・・ん？誰？

見かけない顔だけど」

俺は聞く

見ると身長は165cm

ぐらいである、俺より

15cmぐらい低いな
って言うか細っ！

俺が勝手にそう思っていると

「『読者戦』をしに来ました」

「ーッ！」

『読者戦』、あるサイトに登録している作家が読者を獲得するため
に行く戦いのことだ

自分の作品のキャラクターを使い、相手を倒すまで
やる戦いである

「開戦か？」

「『空間隔離』！」

そういつと視界が一瞬黒く染まり、視界が戻った時には俺とそいつ
以外に生物はいなくなっていた

『空間隔離』、そのまんまの意味で俺は今、こいつが作り出した空
間にいることになる

「行きますー！」

そういつとそいつはポケットから携帯を取り出した

携帯を右手に持っているので右利きだろう

「タイトル題名

『キャラクター仮面ライダーフォーサー！平穩、正義そして欲望』
登場人物

『セリフ不音龍一』！
顕現！」

その男子生徒の姿がどこかで見たことのある姿に変わる・・・なん
だっけ？

「行くぞ！」

身長が175cm程になりガタイが普通になった

えーっと・・・あ、

『緋弾のアリア』のキンジだ、目つきがちょっと鋭いけど、んー俺、
5巻までしか見てないからな〜よくわかんないや
って言うか

声が一方通行ww

制服は赤色のブレザーに
青色のネクタイになっていた、何だあの服？

後で知り合いに聞いたが、『11eyes』ってゲームの
制服らしい

俺はエロゲどころかギャルゲすらしたことないから
わかんねえや

「食らえっ！」

その男子生徒が俺の顔ギリギリに蹴りを放ってくる

「うおっ！」

俺まだ顕現セッテしてないって！」

俺も（校則違反だが）携帯を取り出す

「タイトル題名』とある科学とテストと召喚獣』、キャラクター登場人物『黒崎龍也』！
顕現セッテ！」

俺の髪が銀色になって長髪になり首後ろで縛られる
身長は少し低くなり服装が文月学園の制服になる

別に俺は声優さんを
指定してないので声は
そのままだ

「作者ID166151
いっしょく黒龍高二だ」

「申し遅れました、

作者ID1665362

ダークハート未元定規

中二です」

そついうと未元定規は俺にハイキックを繰り返す

「足技が得意か、俺もだ！」

俺も右足のハイキックで
応戦する

ガッ！

俺と未元定規の足が二人のすねにヒットした

ジン

「・・・・・・・・」

俺達は激突した、
足を押さえる

「・・・・・・・・くっ、中々やりますね」

そついう未元定規の目は
若干涙目だ

ついでに言っておこう
俺も涙目だ

そついうと、起き上がり
自分の携帯とは別の携帯を取り出した

未元定規はその携帯を口に近づけ

「four, zero, four。
スタンディングバイ」

《standing by》

「変身！」

《unlock》

《complete》

そういつと未元定規の身体に何かのスーツが装着されていく

「仮面ライダー？」

スーツを装着した格好は
仮面ライダーに似ていた

『ブラスト！』

《Blast mode》

さっきの携帯が銃になった

ダァン！

「うわぁっ！」

俺の顔面すれすれに水色の弾丸が飛んできた

「くそっ！『許可証』使用！」

俺は携帯のファイルを開き使用する

「『^{リアレイズ}武装顕現』！」

俺は右手に力を込め、拳銃を出現させる

「なっ！それは琥珀さんの『俺はテストの召喚獣』の主人公の能力
！？」

「ふっ、ちゃんと許可は
貰っている！」

『許可証』、他の作家さんのキャラクターや能力を
使用するときに必要な

データだ、『許可証』がないと能力が使用出来ない

俺は拳銃を連射する

ドガガガガガガガッ！

普通の拳銃からは絶対に
聞こえない音が鳴る

「・・・ただの拳銃なのに連射力がガトリングガン並ってどうい
うことですか？」

それを楽々と避ける、
未元定規

「それを楽々避ける君も
どうかと思うけど・・・」

まあ、それは……俺がルールだ！って事で
「なるほど」

『ブレイド！』

《Blade mode》

未元定規は携帯を元に戻すと銃だった携帯が刀剣に
変わった

「はあっ！」

未元定規は俺に向かって
剣を振り下ろす

「ちよい！俺はまだ拳銃！」

俺は拳銃で受け止めるが
簡単に切り裂かれる

「チツ！『武装顕現』！」

俺は両手に力を込め、
黒い日本刀を二本出現させる

「……いや、両手は卑怯じゃないですか？」

「……こんな言葉を知っているか？」

「？」

未元定規は首を傾げる

「卑怯、汚い、敗者の戯言」

「最低ですね！」

ごもつとも

そう言いながら、未元定規は俺に迫ってくる

「よつと！」

キーン！

俺は剣を受け止め、距離を取り、刀を振りかぶる

「なんとなく今思い付いたシリーズ、パート1！

『ドラゴンブレイカー』！」

俺が刀を振ると剣先から

龍が出現し、相手に迫る

「うわっ！」

ドオオオン！

「……凄いですね」

何とか避け、こっちに向き直る

「ならばこっちも・・・」

すると、未元定規は急に
右目を押さえた

「くっ！右目が疼く！・・・ま、まさか！あいつが、目覚めてしま
ったのか！？」

厨二病かい・・・
でもなく俺達的能力ってな

急に未元定規の髪が白くなり、目が赤く染まる

「ああ？チツ、俺を呼び出すんじゃないよ・・・ったく」

やったことが実際に起きるんだよなあ、って言うか
完全に一方通行ww

「という冗談は置いておきまして」

一瞬で制服キンジ状態に
戻る

「・・・書いてる俺が言うのもなんだがひでえ」

「？」

「無自覚か」

俺は首を振る

「まあいいでしょう、
これでトドメです」

未元定規が片腕を上げると上空に氷の塊が形成されていく

「ま、まさかこれって・・・くそっ!!」

俺も両手を合わせ、
手の中に雷を形成する

くそっ!まさか、これをやられるとはな!こっちも
これで行くしかねえ!

「うおおおおおおおおおおお!」

そして、両者一斉に相手に向かって放出した

「エターナルブリザアアアアアアドオオオオ!」

「ライトニングスパアアアアアアアアアアク!」

厨二病が生み出した、
最強魔法を相手に放つ、
その瞬間、俺は意識を失った

「……………ん？」

気絶していた状態から
意識が回復し、俺は目を
開ける、見えるのは青い空

「……………負けたのか？」

「……………いいえ、引き分けみたいです」

すると、近くから声が
聞こえた

首を動かしてみると、
同じ格好をした未元定規がいた

「引き分けか、お前は どうする？再戦するか？」

「……………いいえ、今日は
もう帰ります、身体が痛いですし」

そう言って未元定規は身体を起こしながら変身を解除する、だが、
痛いようで、少しぎこちない

「はあ、マジで身体がいてえ……………」

俺も身体を起こしながら
変身を解除する

すると空間が消え、
生徒達が動き始める

「今度は負けません、
首を洗って待っていてください」

そういつと未元定規は
帰って行った

ええ〜今度つて、また来るの〜?・・・ま、いいか

俺は自転車置き場に行くこととする

「・・・・・・・・・・・・・・・・!!

何かビビッて来た!

いいアイデアが浮かんだぞ!」

とりあえず、家に帰って

ノーパソに下書きを書こう!

俺はそう思い身体の痛みも忘れ、家に帰宅した

作者達の戦いは続く・・・

番外編 とある作者の作品戦争（後書き）

作「はい、と言うわけで

いかがだったでしょうか！』とある作者の作品戦争』！」

上「なんだこれ？」

吉「凄いカオス」

作「凄いでしょ〜読み直してびっくりした」

上「いや、お前が書いたんだろうが」

作「うん、まあ、そうなんだけど、はっきり言って
記憶がないんだよね」

上「はあ？」

作「5日ぐらい前に何か書こうって思って布団でノーパソやってい
たら書きながら寝落ちしていて気がついたらこれの6割ぐらい、
出来てたの、その後

未元定規さんに許可取ったり、質問したりして、完成させたんだ」

上「そうだったのか」

作「ああ、琥珀さんの能力は実はもっと先に使う予定だったんだけ
どね、

すいません、琥珀さん」

吉「後はこの作品を皆が
どう思うかな」

作「くう！感想お待ちしております！」

懐かしき記憶（前書き）

親指が、死ぬ！

くっ！二日連続投稿は
無謀だったか

懐かしき記憶

「・・・ねえ」

「ん？なんだ？」

「・・・さつき雄二が話していた『大化の改新』っていつのこと？」

「三年生にもなつてまだそんなことも、知らないのか？翔子は馬鹿だなあ」

「・・・まだ習つてない、雄二の頭が良すぎるだけ」

「覚え方は簡単だぞ？」

『無事故の改心』で覚えるんだ」

「・・・無事故？」

「忘れなよ？大化の改新は無事故でおきたから・・・625）・・・
（年だからな」

「・・・わかつたきちんと覚えた」

「よし、忘れるなよ」

「大丈夫、絶対忘れない」

ガバッ

「……………随分懐かしい夢を見たな」

ダッ！

「いたぞ！Bクラスだ！」

「高橋先生をつれてるぞ！」

現在Bクラス戦の真つ最中俺は明久の後ろについていく

Bクラスは文系が多いため数学物理が得意な俺は多少は活躍できる
だろう

だが、英語は全くダメなので山田先生の方には行かないようにしよう
向こうは十人程度なので
あくまで様子見のようだ

「生かして帰すなッ！」

物騒なセリフが皮切りとなりBクラス戦が始まった

総合科目

野中長男 1943点

V S

近藤吉宗 764点

数学

金田一裕子 159点

V S

武藤啓太 69点

物理

里井真由子 152点

V S

君島博 77点

なんて強さだまさに桁が違う

「止めを刺される前にフォローするんだ！」

明久の指示が飛ぶ、そこに

「おっ遅れ・・・まし・・・た・・・ごめ・・・んな、さい・・・
はぁ」

姫路が息絶え絶えにこっちに来た

「来たぞ！姫路瑞希だ！」

周りがざわめく

「姫路さん、来たばかりで悪いんだけど」

「行ってくれるか？」

「は、はい、行って・・・きますっ」

姫路がふらふらした足取りで向かう、大丈夫かな？

「Bクラス岩下です、

Fクラス姫路さんに

数学勝負を申し込みます！」

「律子、私も手伝う！」

二人は友達のようにだ、

それにしてもたった十人しか来てないのに二人がかりか、警戒して
るんだな

「あ、Fクラスの姫路ですよろしくお願いします」

姫路がかかる挨拶し召喚をした

「『サモン!』」

「あれ？姫路さんの召喚獣、アクセサリーしてるね」

姫路の召喚獣の左手には
金色の腕輪をしていた

「あ、はい、数学は結構
解けたので・・・」

「待てよ、腕輪って確か
・・・」

「じゃあ、行きますね」

姫路は左手を握る、すると姫路の召喚獣の左手も光る

「ちょ、ちよつと、待ってよ!？」

「律子!とにかく避けないと!」

二人の召喚獣が横に跳ぶ

キュボツ!

左手から火柱が飛び、
召喚獣の一体を消し炭にする

「きゃあああ　　ッ!」

「り、律子！」

数学

姫路瑞希 412点

VS

岩下律子 189点

菊入真由美151点

そつだ、400点以上取ると特殊能力付きになるんだっけ

「ご、ごめんなさい、これも勝負ですので！」

もう一体の召喚獣を剣で
切り裂いた

「い、岩下と菊入が一撃だと!？」

「姫路瑞希、噂以上に危険な相手よ！」

「え、え つと・・・」

み、皆さん頑張ってください！」

姫路の指揮官らしくない

指示、だが、効果は絶大のようだ

「やったるでえ ツ！」

「姫路さん、サイコ ツ！」

根本？・・・ああ、あの
ボロ雑巾か、懐かしいな・・・

「・・・なるほど、戻っておいた方が良さそうだね」

「雄二に何かあるとは思えんが念のための」

こうして、俺達はFクラスに向かった

懐かしき記憶（後書き）

作「はい、皆さん

こんばんは、黒龍です、

段々あのテンションを維持するのがしんどくなってきました」

上「ぶつちャけるな」

吉「まあ、確かにあの

テンションだと文字数も
多くなるしね」

作「とりあえず親指が痛いま、それはいいとして」

吉「いいんだ」

作「昨日投稿したカオス見た？」

上「見た見た見た凄かった」

作「それでさ、PVって

いくらいったのかな？
って思ってた見たわけよ

そしたらさ………

昨日のPV 1058

()

()

(。・;)」

作「まさか4桁に行くとは・・・なんだ？まさか皆はカオスが好きなのか！

本編より番外編の方が好きなのか！？
今までで一番アクセス数
多かったわ！」

上「どつどつどつ」

吉「落ち着いて落ち着いて」

作「・・・また、やるか？」

上「え、マジで？」

作「ここでまたもや
アンケート！」

また、あのカオスを
見たい方はアンケートに

『あのカオスをもう一度』等と書いて送ってください！
ちなみにアンケートが三票以下の場合には実行します！
嫌な方は

『カオスだと？断る！』
等と書いてください

参加したい方は

『祭りじゃあ！俺にも参加させろやあ！』
等と書いてください

ちなみに参加される方は

『口調や性格が違う場合がある』

『出てくるのは作者と作品の主人公のみ』

『カオス』

この三つが許せる場合のみ参加してください

ちなみに（無いとは思うけど）参加人数が多い場合は先着三名様までです

ちなみに参加される方は

アンケートには賛成になります！

作品を知らない場合は

読んで勉強します！

古参も中堅も新参も

大募集です！」

上「ちなみに賛成も反対も参加も居なかったら？」

作「・・・・・・・・・・・・・・・・また未元定規さんを

巻き込む?」

吉「いや、流石に迷惑で
しょう!」

作「こんなことにならないためにも何とぞ、
アンケートを!」

上「期限はBクラス終戦
までです」

作「マジでお待ちしております!orz(土下座状態)」

「男のツンデレって女子がやるようにやったらかモいけどクールにやったらめっ

アンケート途中経過

賛成 2

反対 0

参加 1

参加者後一人は欲しいな

「男のツンデレって女子がやるようにやったらキモいけどクールにやったらめっ

Fクラスに着いて、戸を開けると

「・・・つわ、こりゃ酷い」

「まさかこうくるとはのう」

「卑怯だな」

卓袱台や文房具が見事なまでにボロボロにされていた

「これじゃ補給がままならいね」

「地味じゃが点数に影響のでる、嫌がらせじゃな」

そこに雄二が来た

「あまり気にするな、

修復に時間がかかるが作戦に大きな支障はない」

「雄二がそう言うならいいけど・・・」

「そついやあ、教室がこうなってるのに気づかなかったのか？」

「協定を結びたいという、申し出があつてな、調印のために教室を空にしていた」

「協定じゃと？」

「ああ、四時までには決着がつかなかったら戦況をそのままにして、続きは明日午前九時に持ち越しその間は試召戦争に関わる一切の行為を禁止する、つてな」

「それ、承諾したのか？」

「ああ」

「でも、体力勝負に持ち込んだ方がウチとしては有利なんじゃないの？」

「姫路以外は、な」

姫路の体力は最底辺に位置するからな

「あいつ等を教室に押し込んだら今日の戦闘は終了になるだろう、そうすると」

作戦の本番は明日と言う事になる」

「そうだね、この調子じゃ本丸は落とせそうにないね」

「その時はクラス全体の戦闘力より姫路個人の戦闘力の方が・・・」

ま、いいや、俺は寝よ

め、めんどくさくなったからじゃないんだからねっ！

「ん？ふわあああああ、よく寝た」

三十分ぐらいか、寝てたのは

「あ、龍也、起きた？」

すぐそばに明久がいた、
だが

「明久、なぜ散々殴られた後、頭から廊下に叩きつけられたような怪我をしているんだ？」

「うん、まあ、色々あって・・・」

どうせ、島田がらみだろうな

「まあいい、今からどこに行くんだ？」

「今からCクラスと協定を結びに行こうと思ってね」

「なんかあったのか？」

「うん、実は……………」

明久から事情を聞く

「なるほど、じゃあ、俺は待機してるわ」

「うん、じゃあね」

明久達はCクラスに向かった

「ふい〜〜〜、きつつ」

「おう、お帰り、当麻」

「ただいま、戦闘には参加しなかったが指揮するのが大変だった」

しばらく経って

「龍也！」

雄二達が教室に駆け込んできた

「どっした？」

「Bクラスに待ち伏せされた、いまは明久と島田で

応戦している」

「なら俺が行く！当麻も行くぞ！」

「おうっ！」

そのまま当麻と一緒に教室を出る

そのまま、廊下を走っていると

ブシューウウウウウウ！

あれは・・・消火器！

あそこか！

その煙に当麻と一緒に突っ込む

「くそっ！吉井達はどこに行った！」

「・・・あれ？」

目の前にはBクラスの生徒が六、七人ほどいた

「どうやら入れ違いになったようだな」

「うわゝ不幸だゝ」

「お、お前らは黒崎と上条！」

「こいつらも要注意人物だ！ここで倒すぞ！」

「こつちには七人もいるんだ！全員でかかるぞ！」

・・・へえ

『サモン！』

数学

Cクラス 七人

平均 168点

「七人でかかれば倒せる？」

「そいつはとんだ幻想だな」

「「サモン！」」

数学

黒崎龍也 672点

上条当麻 561点

V S

Cクラス 平均168点

『なっ!?!』

「「さあ、その幻想、
ぶっ壊してやるよ」「」

「男のツンデレって女子がやるようにやったらキモいけどクールにやったらめっ

作「どうも、明後日から

テストだけでも全く勉強をしようとしなない黒龍です」

上「ダメだろそれじゃあ」

作「分かっているんだ！

これじゃダメなことぐらい！だがな！勉強する気が

一ミクロンも起きねえんだよ！・・・ま、それはいいとして」

吉「だめでしょ」

作「早く一巻の内容を終わらせたい！やりたいことがあるから！」

上「何だ？やりたいことって？」

作「詳しくは秘密だが

別の話を書こうと思う」

上「別の話？番外編って

ことか？」

作「まあ、そういう感じだ詳しくはAクラス戦後に話す

あ、後冷静に考えたら

Bクラス戦後に書き始めると普通に時間がかかるためアンケートは
後二話投稿

したら終了にさせて

いただきます、やりたいことに向けてスピードアップするので申込みはお早めに！」

上「ではうまく纏まったのでおよろしく！」

See you~

「テストっていらなくなかね?」**b y 黒龍** 「そしたらこの作品が消える」**b y 龍也**

今回は短めです

「テストつていらなくね？」 b y 黒龍 「そしたらこの作品が消える」 b y 龍也

「くっ！怯むな！」

リーダーっぽい奴が3人
引き連れ、俺に向かってきた

「よっ」と

俺は最小限の動きで避ける

「おっ、結構ちゃんと
動かせるな、明久まではいかないが」

俺は刀を構え、袈裟斬りにする

「うわっ！」

「戦死者は補習！」

鉄人がどこからともなく
現れ、生徒の一人を連れていく

「いやだああああ・・・」

心の中で手を合わせる
合掌

「ああ、なんかめんどくさくなった、当麻、使っぞ」

「マジか」

そう言っつて当麻は召喚獣を下げる

「なんだ？」

Bクラスの連中がざわつく

「俺も『これ』はあんまりうまく使えないんだ、だからさ、文句は言つなよ」

そして、俺は腕輪を発動した

「食い荒らせ『黒龍』」

俺の召喚獣の腕輪が光り出した

「「ただいま」」

「あ、お帰り、龍也、当麻」

明久が出迎える

「そっちはどうだ？」

「うん、僕も美波も少し
点数が削れたけど戦死は
してないよ」

「そうか」

「・・・え？『美波』？」

確か島田の名前だよな
いつの間にそんな仲になって・・・

「お、龍也達も戻ったか」

「無事だったかア？」

「無事だったようじゃな」

「ああ、ただいま」

簡単な挨拶を交わす

「さて、お前ら」

「ん？」

雄二の方へ向き直る

「こうなった以上、
Cクラスも敵だ、
同盟戦がない以上は連戦という形になるだろうが、
正直Bクラス戦の直後に
Cクラス戦はきつい」

向こうもそれが狙いだろうCクラスをどうにかしないと、例えば
Cクラスを
別のクラスと戦争させるとか

「それならどうしようか？このままじゃ勝っても
Cクラスの餌食だよ？」

「そつだなア・・・」

「心配するな」

頭を悩ます俺らに雄二が
野性味たっぷりな活き活きとした顔で告げる

「考え？」

「ああ、明日の朝に実行する、目には目を、だ」

この日はそれで解散となり続きは翌日へと持ち越しになった

「テストつていらなくな〜ね？」 b y黒龍 「そしたらこの作品が消える」 b y龍也

作「テストなんて消えてなくなればいいんだ」

吉「え、僕らの存在全否定？」

上「ひどくねえ？」

作「現実のやつだよ
特に数学と英語と物理」

吉「龍也の苦手科目と得意科目だ」

作「その三つは無理」

上「勉強しろ」

作「だが断る！」

吉「いや、しょうよ」

作「ま、いいとして

なんやかんやで二話投稿したので結果発表！

賛成 2

反対 0

参加 1

カオス祭が

開催となりました！

ありがとうございます！

投票してくださった皆様

則次 火焰様！

ソニッククエイ様！

本当にありがとうございました！

上「カオス祭はBクラス戦の後だ」

吉「それでは、また」

全「さようなら」

「一日三話投稿してみました!」**by黒龍**「話は昨日だろ」**by龍也**(前書き
流石に連続でやると
短くなるな

「一日三話投稿してみました！」**by黒龍**「一話は昨日だろ」**by龍也**

「昨日言っていた作戦を
実行する」

翌朝、登校した俺らに雄二は開口一番そう告げた

「作戦？でも、開戦時刻はまだだよ？」

今の時間は午前八時半
開戦予定時刻まで三十分
ぐらい早い

「Bクラス相手じゃない
Cクラスの方だ」

「なるほど、何をするんだ？」

「秀吉にコイツを着てもらおう」

そう言っただけ雄二が取り出したのはうちの学校の女子の制服

・・・ところで雄二、
なんでそれはどうやって
手に入れたんだ？
返答次第では俺はもう
友達をやめるかもしれない

「それは別に構わんが、

ワシが女装してどうするんじや?」

秀吉、男らしくなるのは
もう諦めたのか?

「秀吉には木下優子としてAクラスの使者を装ってもらおう
なるほど、それが狙いか

「と、いうわけで秀吉、
用意してくれ」

「う、うむ……………」

雄二から制服を受け取り
その場で着替える秀吉

「……………(パシヤ
パシヤパシヤパシヤ!)」

ムツツリーニは凄い早さでカメラのシャッターを切っている
明久は顔を真っ赤にし
胸を押さえている

「何故、ときめく?」

「なんでだ?相手は男なのに……………」

「よし、着替え終わったぞい、ん?皆どうした?」

秀吉が首を捻りながら言う

「……秀吉」

「なんじゃ？龍也」

「……世の中には、
知らない方がいいこともあるよ」

「待つんじゃ龍也！
何故昔の思い出を語る
老人のような目をしていうのじゃ！」

あの頃は楽しかったな、
秀吉もまだ無邪気だったし俺と優子もまだ仲良しだったし……

「んじゃ、Cクラスに行くぞ」

「う、うむ、釈然とせぬが仕方ない」

雄二が秀吉を連れて教室を出て行く

「・・・也、龍也！」

「（。口。）はっ！」

「大丈夫？何かトリップしてたみたいけど」

「ああ、悪い

（っ）（ゴシゴシ

懐かしい事を思い出してな）　　ー（）」

「うん、とりあえず

顔文字」

「あ、悪い・・・っで、

そっちはどうだ？」

「あ、こっちは大丈夫だよ挑発は成功したよ」

「そうか、じゃ、準備を

するぞ」

「うん」

よし、俺も準備をするか

「一日三話投稿してみました！」b y黒龍「一話は昨日だろ」b y龍也（後書き

作「流石に連続は無謀だったか」

上「短いしな」

吉「もうあとがきのネタもないしね」

作「とりあえずカオスの
情報を

今回は作者達はちょっと
前回と違う戦いをします

ちなみに今気づいた誤字

誤

『とある作者の作品戦争』正

『とある作家の作品戦争』

今度から直します

以上！」

とりあえず終わりです

次回をお楽しみに！

「人の恋路を邪魔する奴は『自主規制』にひかれて死んじまえ」b y黒龍

ヴアゝアアアアアア！全くYO！

何時になったら底辺の作家から抜け出せんだ俺はYO！ってなわけ
で黒龍です

今日も頑張つてこの作品を投稿したいと思います！

「人の恋路を邪魔する奴は『自主規制』にひかれて死んじまえ」by黒龍

「ドアと壁をうまく使うんじゃー！戦線を拡大させるでないぞ！」

秀吉の指示が飛ぶ

その後、Bクラス戦が開始され、俺らは昨日中断した位置から開始した

雄二が『敵を教室内にとじこめろ』だと、

まあ、それはいい

姫路の様子がおかしい

本来は指示を出さなきゃ

いけないのだが

全く指示を出そうとしないそれどころか動くうともしない、何があった？

「勝負は極力単教科で挑むのじゃ！補給も念入りに行え」

今は副指令の秀吉で一応

作戦道理にいつている

「左側出入口、押し戻されています！」

「古典の戦力が足りない！援軍を頼む！」

まずいな古典か、うちの
成績上位者は理系ばかり
だからな・・・

「姫路さん、援護を！」

明久が姫路を呼ぶ、だが

「あ、そ、そのっ・・・」

姫路は戦線に関わらず涙目になっている、マズい！
突破される！

「・・・サモン」

「サモン！」

古典

一方通行	217点
上条当麻	163点

タイミング良く一方通行と当麻が入ってくれた、
・・・っていうか
死角なしかよ、一方通行

まあ、これで半分は補給に向かえた、これでしばらくは持つだろう

俺は姫路の元に行く

「姫路さん、どうかしたの？」

「本当だぞ、姫路、具合が悪いなら保健室で・・・」

「そ、その、なんでもないですっ！」

首を大きく振りながら

姫路は言う、

本当は何かあるのが見え見えだ

「そうは見えないな」

「何かあったなら話してくれないかな？作戦も変わるかも知れないし・・・」

「本当になんでもないんです！」

そう言っているが、

涙目のままだ、一体何を隠している？

「右側出入口、教科が

現国に変更されました！」

「数学教師はどうした！」

「Bクラス内に拉致された模様！」

チッ！俺の得意科目が消された！

「私がいきます！」

そう言っつて姫路は戦線に加わろうとするが・・・

「あ・・・」

急に動きを止めてしまった何かを見て止まったようだ視線をそっちに向けると

ボロ雑巾・・・もとい
根本がいた

何かを持っていたので
俺はよく見てみる

「っ！」

あいつが持っていたのは
三日前に姫路が明久に向けて書いたラブレターだった

「・・・なるほどな」

「・・・なるほどね、」

そういうことか」

明久も気づいたらしい

昨日の時点でおかしいとは思った、あいつが対等な
条件の提案をしてくるなんてな

あの時にはすでに姫路を
無力化にする予定だったんだな

「姫路さん」

「は、はい・・・？」

「具合が悪いなら休んでてもいいよ」

「だ、大丈夫ですから！」

「やせ我慢はやめておけ」

「ちょっと忘れ物をして気が気でないんだろ？」

「ッ！・・・はい」

「じゃあ、僕達は用があるから行くね」

「御坂は、当麻と交代して左側出入り口に行け！」

「当麻は一人で右側出入り口を足止めしろ！」

「他の奴等は残っている奴は援護！無い奴は補給に行け！」

「俺はそう指示を出して」

「明久と一緒にFクラスに」

「向かう」

「面白いことしてくれるじゃないか、根本君」

「そうだな」

「人の恋路の邪魔する奴は
どうなるか教えてやるよ」

「人の恋路を邪魔する奴は『自主規制』にひかれて死んじまえ」by黒龍

作「早速だがまだカオスが一文字も書けてない」

上「本当に早速だな」

吉「っていつかまだ書けてないの？」

作「まあ、頑張れば書けるからそれはいいや
活動報告にもある新作のことだが・・・」

吉「ああ、あの事ね」

作「ああ、あの事だが近々アンケートを取ろうと思う」

上「マジで？」

作「ああ、詳細はまた今度って言うことで」

上「分かった・・・ん？」

そ「ういやあ、最近、後書きで本編の事を話してないんだが？」

作「うん、ここで触れると感想が来なくなりそうなのがして」

吉「なるほど」

作「じゃ、もう話す事が無いのでまた会おう！」

『オチなう』

「カオスが一応できた」by黒龍 「そんなカオスで大丈夫か？」by龍也

はい、お久しぶりです

最近忙しすぎて

全然書けませんでした

また、頑張ります！

「カオスが一応できた」by黒龍 「そんなカオスで大丈夫か？」by龍也

「雄二！」

「どうした明久に龍也？」

「脱走か？チヨキでシバくぞ」

「目潰しは勘弁してほしいな」

「教室に飛び込むと、」

「雄二はノートに何かを書き込んでいた、」

「俺らと敵の現在の戦力を記したものだと思われる
本当にマメだな、雄二は」

「話があるんだ」

「……とりあえず、聞こうか」

「雄二も何かを察したのか」

「こっちを向き、真面目な顔をした」

「根本君の着ている制服が欲しいんだ」

「……お前に何があったんだ？」

バカが、主語を抜かすなよ

「ああ、いや、その。えーっと・・・」

「明久、俺が説明する」

俺は雄二に近づき耳打ちする

「・・・なるほどな」

「龍也、一体何を言ったの？」

「まあいいだろ、勝利の暁にはそれくらいなんとかしてやるよ」

雄二が強引に話を打ち切る

「で、それだけか？」

まだ、何かあることは分かりきっている顔で言う

「それと、姫路さんを今回の戦闘から外してほしい」

「理由は？」

「理由は言えない」

どうせ、察しているだろうけどな

「どうしても、外さないとダメなのか？」

「うん。どうしても」

雄二が顎に手を当てて考え込む

今、明久はかなりの無理を言っている

姫路抜きでBクラスを倒すのは足軽だけで城を落とすようなものだ

一方通行や当麻や御坂は
扉を守護するので精一杯だ

「頼む、雄二！」

明久は頭を深く下げる

「俺からも頼む」

俺も頭を下げる

「・・・条件がある」

「条件？」

「姫路が担う予定だった
役割をお前がやるんだ
何やってもいい、必ず成功させる」

承諾してくれた、だが、
入り口は塞がれているし
明久には姫路や一方通行のような火力はない、
恐らく失敗はそのまま敗北に繋がる、しかも
皆のフォーローはない。

さて、明久はどうやって
目的を達成する？

「それじゃ、うまくやれよ」

雄二はそういって、教室を出ようとする

「ん？どこかに行くのか？」

「Dクラスに指示を出してくる、例の件でな」恐らく室外機を破壊する

指示だろう

「明久」

教室を出る直前、雄二は
こちらを向かずに言った

「確かに点数が低いが、
秀吉やムツリーニ、
当麻や龍也のように
お前にも秀でている部分がある。だから俺はお前を
信頼している」

「・・・雄二」

「うまくやれ、計画に変更はない」

そう言い残し、雄二は教室を後にした

明久が秀でている部分・・・・・・・・
細かい操作技術、だが

狭い場所では役に立たない

「「・・・あ」「

あるじゃないか、明久だけに許された方法が

「・・・痛そうだなあ」

明久も気づいたようだ

明久はこつちを向き、俺に向かって言う

「龍也、手伝ってくれる？」

「もちろんだ、俺とお前の仲だろう」

俺は拳を明久の前に出す
明久も気付き、拳を軽く
ぶつける

「懐かしいね」

「そうだな」

中学時代にやったのが最後かな

「よっしゃ！あの

外道に目に物見せてやる！」

「ああ、行くぞ、明久」

おっと、その前にと

「美波！武藤君と君島君も、協力してくれ！」

教室内で補給テストを受けていた三人に声をかける

「どうしたの？」

「何か用か？」

「補給テストがあるんだけど」

「テストは中断、その代わりに、僕達に協力して欲しいこの戦争の鍵を握る大切な役割なんだ」

明久がそう言うと、島田が表情を引き締める

「・・・随分とマジな話みたいね」

「ああ、ここからは冗談抜きだ」

「何をすればいいの？」

明久は言った

「僕と召喚獣で勝負をして欲しい」

「カオスが一応できた」by黒龍 「そんなカオスで大丈夫か？」by龍也

作「前回の前書きが何か分かった奴は二コ厨！」

上「それよりも謝罪しろ」

作「すいませんでしたーッ！」

吉「そう言えば今週は

インターンシップ

(職場体験)があつたね」

作「おかげで休日まで駆り出されて大変だった」

上「履歴書さつさと提出しねえだからだろ」

作「だってさあ！

自己アピールに特技を書けって言われたけど

俺の特技って速読と一度

読んだ文庫本の内容を忘れないぐらいしかねえよ！

就職の何の役に立つんだ！分かるかポケエ！」

上「落ち着け」

作「久しぶりだから語るぞ」

活報にも載っているけど、文化祭があつたわけよ！」

吉「うん」

作「二時くらいかな？」

視聴覚室に生徒が集まっていたから行ってみたら

先生達が居たわけよ

そしたらさ先生達がバンド組んでさブルーハーツの曲を歌ってた訳よ
いやお前普段とキャラ違いすぎだろがぁ！とツッコミたくなりました
はい、次の話」

吉「えーっと、次の話は

アドバイスしてくれたように次回の事について軽く、話します」

作「いつもありがとうございます

次回！

つ、ついにあの人が！

やっと登場！

もう今は口調の勉強をしまくっています！」

上「えーっと、他には何かあったっけ？」

吉「カオスの件」

作「おっと、カオスの件だが、新しい事に挑戦しようとして書き直している

と言っても修正程度だが」

上「これであらかた終わったかな？」

吉「うん」

作「って言うか書いてる

最中に日付変わっちまったよ」

上「どんだけ、長くかいているんだ」

吉「じゃあ、そういうことで」

作「最近見始めた人も恥ずかしがらずに感想カモン！かなり前の話を言ってもいいですよ！

ではまた感想か後書きで

お会いしましょう」

さよなら！

Bクラス戦、決着！（前書き）

テスト中なのに何やってるんだろう・・・

Bクラス戦、決着！

「二人とも、本当にやるの？」

Dクラスに召喚獣勝負の
立会人として呼ばれた
世界史の禁書目録先生が
あの二人に念を押す。

「はい、もちろんです」

「このバカとは一度決着をつけなきゃいけないかったです」

向かい合つのは明久と島田

「でも、それならDクラスじゃなくても、いいんじゃないの？」

先生の言うとおり、
場所はちよつとお邪魔しているDクラス、でも、戦うのはFクラス
同士。

周りにいるのも全員Fクラス生徒、禁書目録先生からしてみると状
況がよくわからないだろう

「仕方ないんです、このバカは《観察処分者》ですから、オンボロのFクラスで召喚したら、戦いの勢いで教室が崩れちゃうんで」

「もう一度考え直したら？」

「いえ、やります、彼女には日頃の礼をしないと気がすみません」

考え直すように説得してくる禁書目録先生に有無を言わせぬ口調で言い切る

「分かった、出来るだけ、教室は壊さないようにしてね」

「すみません、今から大穴を開けます」

禁書目録先生が少し距離を取る

これで召喚ができるな

二人は大きく息を吸って、腹の底から声を出した

「「サモンっ！」」

二人の召喚獣が登場した

「行けっ！」

明久が島田に攻撃しようと拳を振るが島田の召喚獣が避け、後ろの壁に激突する

ドンッ！

「ぐ　　うつ！」

明久が苦悶の声をあげる

だが、構わず殴り続ける

「つう………つ！」

また、壁を殴る

教室を揺るがすほどの力をこめた一撃だ
その反動も半端じゃないだろう

「アキ、時間がないわよ」

島田が壁にかけてある時計を見上げて告げる

現在時刻は午後二時五十七分、作戦開始まであと三分

『お前らしい加減諦めるよな、昨日から教室の出入り口に集まりやがって、暑苦しいことこの上ないっての』

隣からボロ雑巾の音が聞こえてきた、目障り……いや、耳障りだ、空気の振動を遮断……は出来ないので単に聞こえないことにする

『どうした？軟弱なBクラス代表サマはそろそろギブアップか？』

雄二の声だ、姫路が出れないから本隊まで出なければいけなかったんだろう

「らあっ！」

明久の拳が心配だな
そろそろやばいだろう

……遮断

『無用な心配だな』

・・・遮断

『・・・お前ら相手じゃ

役不足だからな』

・・・遮断

『負け組？それがFクラスのことなら、もうすぐお前が負け組代表だな』

会話の内容は分からないがボロ雑巾の声を聞くよりましだな

「はぁあっ！」

四度目の攻撃

結構出血がある

あとで保健室に行かなければ

・・・遮断

『さあな、人望のないお前』

・・・遮断

『・・・体勢を建て直す！一旦下がるぞ！』

・・・遮断

「アキ、そろそろよ」

「うん、わかってる」

周りに目配せをする
皆は黙って頷いた

「吉井君、島田さん、
二人とも何をしようとしているの？」

状況のわからない禁書目録先生が明久達を交互に見る
多分消されないだろうが
さっさと勝負を決める必要がある

「おおおおおっ！」

腹の底から明久が雄叫びをあげる

『あとは任せたぞ、明久』

向こうから雄二がよく通る声で言った

午後三時ジャスト、作戦開始だ

「だああーっしやあーっ！」

明久が壁を思いっきり殴る

「ぐうううっ！」

ドゴオッ！

豪快な音をたて、DとBクラスを隔てる壁が崩壊した

「きゃあああっ！西村先生に怒られちゃっ！」

禁書目録先生があわあわしていた

「くたばれ、根本恭二いーっ！」

「禁書目録先生！Fクラス島田が」

「Bクラス山本が受けます！サモン！」

「くっ！近衛部隊か！」

くそっ！めんどくせえ！

「は、ははっ！驚かせやがって！」

カスは俺らを見て笑う

だが、その顔が驚きに変わるだろう

ここで教科の特性を説明しよう

例えば、科学のスタイル

先生は問題の作りが甘い

例えば、数学の黄泉川先生は採点が早い

例えば今一緒にいる

禁書目録先生は多少のことには寛容で見逃してくれる

では、保健体育は？

それはもうすぐ明らかになるだろう

『ウイイイイイイイイヤツホオオオオツ！』

窓の外からそんな雄叫びが聞こえた

ガツシャアアアン！

・・・窓は空いているのにわざわざ閉まっている方を突き破って来た

「イエーイ！やっぱり最高だな！」

やっぱり、

木原先生じゃなくて

大島先生にすれば

よかったな、

大島先生だったらハーネスとか使って降りてくるだろうし

「・・・え、Fクラス、つ、土屋康太」

怖かったのか、少し声が震えている

「・・・Bクラス根本恭二に保健体育勝負を申し込む」

「ムツツリーニイッ！」

「サモン」

保健体育

土屋康太 441点

V S

根本恭二 203点

カスを瞬殺して

Bクラス戦は終了した

Bクラス戦、決着！（後書き）

作「やつほゝ期待の木原先生が登場したよゝ
それとインデックスも登場したよゝ」

上「テストは？」

作「ちゃんと勉強はしています！」

吉「でも書きちゃだめじゃない？」

作「もういい！内容紹介！」

上「インデックスが凄い成長しているんだが？」

作「驚異的成長者はあと一人いるよ！」

吉「誰？」

作「それは秘密だが、二巻の内容になるかもね」

上「なるほど、ところでだ？」

吉「うん、そうだね」

作「くっくっく、次回をお楽しみに！」

とある作家の作品戦争2 くカオスとカオスとやっぱりカオスく（前書き）

ハッハッハッハ！

来たよ、来ましたよ！

カオスタイムが！

さあ！皆で言いきましょう！

『そんなカオスで大丈夫か？』

とある作家の作品戦争2 くカオスとカオスとやっぱりカオスく

「大丈夫だ！問題ない！」

「黒龍さん！ネタはいいから真面目に戦ってください！」

未元定規の声が飛ぶ
少し前に戻るねっ

「やっと、借りれたか、あの野郎、延滞なんてしやがって」

ひそかに『図書館の主』と呼ばれている俺はやっと借りれた本をカバンに入れ

河川敷の隣の土手を走っていた

リリリリリリン、リリリリリリン・・・

「あり？電話？」

俺の携帯の着信音は

『黒電話』、前友達に「そこまで黒くなくても・・・」と言われたが無視して使い続けている

・・・電源は切っていたはずだが

ウチの高校は携帯を所持しているのがバレると停学になる

ま、ほとんど奴は持ってきているが

そう誰に向けた分からない説明をしながら自転車を止める

まさかな・・・

そう思いながらも携帯を開く

「・・・やっぱり指令か」

指令、このサイトに登録している作家に送られるメールだ
作家に対してある指令を送ってくるだ

なぜメールなのに電話の着信音が鳴るのかは不明だがまあいい
そしてこっちの都合を考えているのか、学校ではならない
ま、指令はつけなくてもいいんだけどな〜と思いながらメールを開く

「え〜っと『バグキャラを削除せよ、場所は……』って二二じゃん！」

よし、逃げるか

そう思って自転車に乗ろうとすると

「おや、奇遇ですね」

後ろに未元定規がいた

「……おい、お前は秋田だろ、なぜほぼ正反対の熊本にいる？」

「指令が来ましたからね、今日は僕を含めて三人しかいないようですよ」

三人？あと一人来るのか？

「ウオオオオオオオオ……！」

ドオオオオオオオン！

「うおっ!」

「何ですか!?!」

上から男が落ちてきた

俺達は携帯を構える

「いてて・・・」

その男は頭を押さえながら土煙の中から出てくる

いや、今のを痛いで済ませるって・・・

「ん?あ、お前らが残りの二人か?」

どうやらこいつがもう一人らしい

身長は170cmほど、服装は俺と同じ学ラン、少し長めの髪に平均よりがっしりした体つき

あれだな俺のイメージだと伝勇伝のライナに近いな

・・・って言うか、なぜ、上から落ちてきてほぼ無傷なんだ? 顕現ハッテしていないのに

「俺は作者ID172961、
則次火焰、中三だ」

「あ、僕は作者ID166362、
未元定規、ダークハート中二です」

「俺は作者ID166151、
くじゅう黒龍、高二だ」

簡単に自己紹介を済ませ、俺は気になっていたことを聞く

「そついやあ、何で上から落ちてきた？」

「ん？ああ、空を飛んで来ようと思ってたら、勢いをつけすぎてな
いや、それなら・・・」

「お前、こいつみたいにテレポートしろよ」

「あ、その手があったか！」

・・・もういや

「まあいい、っで？バグキャラはなんだ？」

『バグキャラ』
既存する作品のキャラクターが三次元に現れて、三次元を破壊しようとする奴等だ

性格も口調も違っし、なんか黒いし、力めっちゃ強いし、嫌なんだけどな

『口調と性格が違うのは決して俺が作品を読み込んでいないんじゃない！仕様だ！』

頭の中にそんな声が聞こえたが無視した

「え〜っと『緋弾のアリア』の峰理子ですね」

理子が、あのたまにイラっしてすることをやる、あの

「っっていうか、まだ出てこないな、何でだ？」

フィールドには運営が結界を張っていて、人は俺等以外誰もいない

「そうですね、一応^{トモ}顕現しておきますか」

未元定規が携帯を構えたので俺も携帯を構えた

「^{タイトル}題名ツット」とある科学とテストと召喚獣キャラクター、主人公「黒崎龍也」、^{セット}顕現セ」

俺の姿が黒崎龍也に変わる

「^{タイトル}題名ツット」この作品は削除されましたキャラクター、主人公「不音龍一」、^{セット}顕現セ」

未元定規の姿が11eyes制服キンジになる

「^{タイトル}題名ツット」僕と幼馴染と召喚獣キャラクター、主人公「橘侑」、^{セット}顕現セ」

則次火焰の服装がどこかで見たことある、防弾制服に右手には「ベレットM92F」、左手には「赤い刃のバタフライナイフ」

.....

「って、お前もキンジ装備かい！何やね、どんだけ、「緋弾のアリア」好きなんじゃない！って、今回の敵も緋弾やし！」

思わず方言でツッコむ

「別にいいだろ」

「って、黒龍さんも双剣使^{ダブル}ってたじゃないですか」

「ちがうもーん！俺は双剣じゃないもーん、二刀流だもーん」

「黒龍さん、二刀流のことをダブルって言うんですよ」

「なにい！？」

そついやあ、アリアも二刀流だった

「チクシヨウ！絶対に二丁拳銃は使わん！」

俺はそつ言うつ、すると

チャリン

あ、鍵落とした

「おっと、あぶな・・・」

チュイン！

俺の頭部があつた場所を弾丸が通り過ぎていった

「ぬうおおおおお！」

俺は転がる

「危ねえ！やばい！鍵がなければ、俺の頭部がトマト的なことに！」

「いや、顕現しているから殴られたぐらいの衝撃しか、来ないですよ」

そんなことを言った末元定規を無視して俺は起き上がり、撃つた方を見る

「峰理子！」

そこには全体的に若干黒い（肌も服装も）峰理子がいた

理子は拳銃を俺の方に向けて、銃口から煙を出している

「あれ？外しちゃった？」

「しゃあああああ！」

則次火焰が峰理子に突っ込む

「おい！策もなしに突っ込むな！」

「大丈夫でしょう、ほら」

キーン！ダダァン！ギュイン！

空中で見事に空中戦を繰り広げている

「・・・じゃ、大丈夫かな」

俺はとりあえず、刀の手入れをする

「あれ？『武装顕現（by琥珀さん）』じゃないんですか？」

「ほら、流石に人の作品のだし、あんまり使わない方がいいかな？
って思ってたな」

名前も間違えちゃったし

× リアレイズ

リアライズ

「そうですか」

手入れも終わり、次は何をしようかなって思っている

「うおっ！」

ドオン！

俺の隣に則次火焰が墜落してくる

「いてて・・・」

押し気味だったのに何があった？

そう思って上を見ると

「なっ！？」

理子が三人に増えていた

「一人一体ってことですかね？」

未元定規が変身無しで剣状態の携帯と銃状態の携帯を召喚する

「んじゃ、俺も本気だ」

則次火焰も左手のバタフライナイフをマッドブラックのD

デザートイーグル
Eに変

える

「はあ、戦いたくないんだけどな・・・」

俺は刀を二本取り出す、ダブルじゃないよ？二刀流だよ

「よっとうっ！」

「やあっ！」

「オラァ！」

俺達は同時に飛び、俺は右の理子の所に行く

「よう、右理子、なんで増えた？」

「え、右理子なんてひどいぞ」

・・・イラッ

俺はぶりっこ全開の言葉に額に青筋を立てながら近づくが銃で牽制される

ダァン！ キーン！

「りゅーくん、刀じゃ、銃に勝てないぞ」

イライライライライライライライライライラ・・・

「つぶつぶ、無駄無駄」

・・・ブチッ！

「ブ・チ・コ・ロ・シ確定じゃあああああ！」

俺はむぎのんの名言を叫びながら、理子に突っ込む

「無駄だよ！」

ダァン！ダァン！

「オラァ！」

キーン！キュイン！

「きゃっ！」

俺は動体視力を底上げして弾を見切り、相手に向かって弾き返す

「もお〜理子、本気出しちゃうよ〜」

理子がツインを操り、双剣^{カドラ}双銃になる

・・・ハツ、じゃあ、俺も本気で行くか

「・・・イイねイイねエ！最っ高だねエ！」

俺は使いたくない武器を使った

「イイゼエ！使ってヤンよ！俺のカドラを！」

俺は大型の拳銃に日本刀の刃が付いた銃を二丁取り出す

「こつから先は一方通行だア！通りたヤア！俺を倒してから行くんだなア！」

俺は一方通行のセリフを叫び、理子に向かって飛ばうとしたら

「織塵爛流剣術、轟靨派秘奥義・・・X狩刃 ツ！」

「厨二くせええええ！」

思わず叫んでしまった

こつという人って画数の多い漢字とかXって好きだよな！

叫んだ後、あわてて理子の方に飛ぶ

「・・・あ、と、とつー！」

「きゃっー！」

向こうもずつこけて体制を崩している所に突っ込む

「オラア！」

俺は右手の刃で理子の銃を弾き、そのまま銃を撃ち、髪の毛を弾く

そしてそのまま、左手の刃で理子を切る

「きゃあ！」

理子は吹っ飛ばされ、近くの川に落ちる

「うえ〜びしょびしょ」

すぐに乾くからいいだろ

ちなみに乾くスピードはゲームで水に入った後みたいな感じ、つまりかなり早い

もうすでに服には一滴も水はついていない

「わかっただろ？お前らが俺達に勝つことは不可能だ、おとなしく、

二次元に帰って調律されて元通りになるか、削除される」

ま、削除しかないんだがな、今のような状況の場合

「くっ！」

ダァン！

キン！

理子が苦し紛れに一発撃ってくるが俺はやすやすと、弾く

「おうおうおう、何だこの状況は、DS魂が刺激されちまうじゃ熱うっ！」

俺の背中に熱い何かがすごい早さで当たる、めっちゃ熱い！何だ！
？敵の援護か！？

「わり」

則次火焰がいた

「って、お前かい！」

まあいい、そう思って理子に向き直る

・・・どこからか声が聞こえた

『そんなカオスで大丈夫か？』

「大丈夫だ！問題ない！」

俺は間髪入れずに答えた

「黒龍さん！ネタはいいから真面目に戦ってください！」

未元定規に怒られました

はい、真面目にします

「んじゃ、そろそろ終わりにするか」

俺は理子の額に銃を向け発砲しようとしたら

「・・・ふふ」

理子が小さく笑った

「あ？何だ、そぐあっ！」

理子がすげえスピードで俺に突っ込んできた

俺は10mぐらい吹っ飛ぶ

「ゲボッ！」

俺は背中を強打し、肺の中の空気を一気に吐き出す

うげっ、肺が痛い、チクシヨウ俺って肺弱いんだぞ

俺が悪態をつきながら、起き上がると

「・・・・・・・・・・」

さっきの理子とは何かが違う、何か色濃くなってるし

「はあ、早く借りた本を読みたいんだけどな」

俺はそう呟きながら銃剣を構える

・・・いや、やめよう

俺はその武器をしまつて、ある武器を取り出した

俺はそれを手にはめ、拳を構える

つけたのは『オロチ』

分からない奴は緋弾をチエツクだ！

ドオオオオオオオオン！

大きな爆発音が聞こえた、誰かが大技を使ったんだろう

「余計な物を使うより、拳の方がやりやすくていい」

そして俺は黒理子に近づき、拳を振るう

「・・・(ヒョイ)」

黒理子は簡単に避ける

「ふっふ」

「ッ！」

ドガッ！

俺はそのまま、蹴りを黒理子の側頭部に入れる

理子はぶっ飛び、俺から距離を取る

ダダダダダアン！

黒理子が俺に向かって銃を放ってくる

「無駄無駄無駄無駄無駄無駄ア！」

俺は飛んでくる銃弾をすべて殴った
弾丸は地面に落ちる

「……そろそろ、終わりだ！」

トンッ！

俺は素晴らしい黒理子との距離を詰める

「『雷光の連撃打』」
ライトニング・ラッシュ

バチバチバチバチバチイ！

俺は電気を纏った拳で殴る

「……………く……………」

黒理子はボロボロになり、膝から崩れ落ちる

「……………」

俺は懐からD デザートイーグル Eを取り出す

「……………まア、アレだ、気にすんな、実際オマエは頑張ったと思うしな、作家相手にここまで持つている事そのものが奇跡なんだよ、だから……………イイ加減楽になれ」

パン！

俺はD・Eを理子の額に撃つ

理子は足からポリゴンのように消えていった

「おしまい」

俺はD・Eをしまう

「終わりましたか？」

「こっちは終わったぜ」

未元定規も則次火焰も終わったようだ

「俺が一番最後だよ」

「そのようですね、それでは帰りますか」

「そうだな」

俺が自転車に乗ると未元定規が話しかけてきた

「今度会うときは戦う時です・・・失礼しました」

そう言うと未元定規は秋田にレポートした

「じゃ、俺もさいなら！」

ドン！

則次火焰は地面をおもいつきり踏み、飛んでいった

・・・だから、テレポートしろよ

俺はそう思いながら変身を解いた

「よし、帰るか」

・・・おっと、忘れていた

「まずはあいつらにメールっと」

よし、送信っと

メールを送信して、俺は自転車を降りて、画面を見た

「本日は『とある作家の作品戦争2』を見ていただきありがとうございます
ございました、次話は末元定規さんの視点でお送りします」

Let's meet in the following ta
lk・・・

とある作家の作品戦争2 くらカオスとカオスとやっぱりカオスくら（後書き）

あいさつ

黒「いやっふう！来たぜ！カオスが！」

未「またお願いしますね」

黒「いえいえ、こちらこそ・・・」

則「今回からよろしくお願いします」

黒・未「いえいえ」

内容

黒「というわけで今回は、バグキャラ編でした」

未「これを思い付いたきっかけは？」

黒「これはですね、既存キャラとオリキャラが戦ったら面白いかな
くらって思っ作りました！」

則「そうなんですか、ちなみに俺のキャラについてなんですが」

黒「それはですね、何か熱いキャラが欲しくてさせて頂いていただきまし

た、名前も火焰ですし」

則「なるほど」

未「あ、僕は次の撮影があるんで失礼します」

黒・則「いってらっしゃい」

未「行ってきます」

黒「じゃあ、我々も解散しますか」

則「そうですね」

さようなら」

とある作家の作品戦争2

（未元定規編）（前書き）

未「すみません遅れました！」

ス「大丈夫ですよ、時間はまだありますから」

ス「カメラ位置OK！」

ス「マイク位置OK！」

ス「未元定規さん入られます！」

未「よろしくお願ひします」

ス「シーン31、本番5秒前！・・・5、4、3、（2、1）」

とある作家の作品戦争2 〔未元定規編〕

「大丈夫だ！問題ない！」

「黒龍さん！ネタはいいから真面目に戦ってください！」

いきなりボケた黒龍さんに突っ込む
少し前に戻ります

「・・・暇だな」

今日は部活は休み
僕は家に帰宅していた

ぷるるるるる、ぷるるるるる

「あれ？電話？」

僕は携帯を持っていない

作品投稿はPSPでやっている

………っことは

僕は制服のポケットに手をつ込む

「やっぱり……」

僕のポケットの中に携帯が入っていた

まさか………

そう思いながらも携帯を開く

「………やっぱり指令か」

指令、このサイトに登録している作家に送られるメールだ
作家に対してある指令を送ってくる

なぜメールなのに電話の着信音が鳴るのかは不明だ、そしてこっち
の都合を考えているのか、学校ではならない

ま、指令はつけなくてもいいんだけどね、と思いながらメールを開く

「え〜っと『バグキャラを削除せよ、場所は……』……熊本か」

三人だけのようだし、行こうかな

僕は周りに人がいない事を確認して、メールに書いてあった座標にテレポートした

テレポートが終わり、目を開けるといそいそと自転車に乗る、黒龍さんがいた

「おや、奇遇ですね」

「・・・おい、お前は秋田だろ、なぜほぼ正反対の熊本にいる？」

明らかに迷惑という顔で、僕の顔を見る

「指令が来ましたからね、今日は僕を含めて三人しかいないようですよ」

三人？あと一人来るのか？

「ウオオオオオオオオ・・・！」

ドオオオオオオオン！

「うおっ!」

「何ですか!?!」

上から男が落ちてきた

僕達は携帯を構える

「いてて・・・」

その男は頭を押さえながら土煙の中から出てくる

いや、今のを痛いで済ませるって、大丈夫なのかな・・・

「ん?あ、お前らが残りの二人か?」

どうやらこの人がもう一人らしい

身長は170cmほど、服装は黒龍さんと同じ学ラン、少し長めの髪に平均よりがっしりした体つき

・・・って言うか、なんで、上から落ちてきてほぼ無傷なんだろう?

「俺は作者ID172961、

則次火焰、中三だ」

「あ、僕は作者ID166362、未元定規、中二です」

「俺は作者ID166151、

黒龍、高二だ」

あ、僕が一番年下だ

簡単に自己紹介を済ませ、黒龍さんは僕も気になっていたことを聞く

「そっぴゃあ、何で上から落ちてきた？」

「ん？ああ、空を飛んで来ようと思ってたら、勢いをつけすぎてな」

いや、落ちちゃった、じゃないでしょう！

「お前、こいつみたいにテレポートしろよ」

黒龍さんは僕を指さし、言う

「あ、その手があったか！」

「まあいい、っで？バグキャラはなんだ？」

『バグキャラ』
既存する作品のキャラクターが三次元に現れて、三次元を破壊しようとする奴等

性格も口調も違っし、なんか黒いし、力は強いし、嫌なんだけどね

『まあ、口調が違っても、気にすんな』

頭の中にそんな声が聞こえたが無視した

「え〜っと『緋弾のアリア』の峰理子ですね」

僕は携帯の情報を見ながら言う

「っていうか、まだ出てこないな、何でだ？」

フィールドには運営が結界を張っていて、人は僕等以外誰もいない

「そうですね、一応^{トモ}顕現しておきますか」

僕は携帯を構える

「^{タイトル}題名」^{セット}とある科学とテストと召喚獣」、^{キャラクター}主人公「黒崎龍也」、^セ顕現」

黒龍さんの姿が黒崎龍也に変わる

「^{タイトル}題名」この作品は削除されました」、^{キャラクター}主人公「不音龍一」、^{セット}顕現」

僕の姿が不音龍一の姿になる

「^{タイトル}題名」僕と幼馴染と召喚獣」、^{キャラクター}主人公「橘侑」、^{セット}顕現！」

則次火焰さんの服装がどこかで見たことある、防弾制服に右手には
『ベレッタM92F』、左手には『赤い刃のバタフライナイフ』

.....

「って、お前もキンジ装備かい！何やね、どんだけ、『緋弾のアリ
ア』好きなんじゃない！って、今回の敵も緋弾やし！」

黒龍さんが方言でツッコむ

「別にいいだろ」

「って、黒龍さんも双剣使^{ダブル}ってたじゃないですか」

僕はそう言う

「ちがうもーん！俺は双剣じゃないもーん、二刀流だもーん」

・・・いや

「黒龍さん、二刀流のことをダブルって言うんですよ」

「なにい！？」

アリアも二刀流ですし

「チクシヨウ！絶対に二丁拳銃は使わん！」

黒龍さんはそう言う、すると

チャリン

黒龍さんが鍵落とし、その鍵を拾おうと姿勢を下ろすと

「おっと、あぶな・・・」

チユイン！

黒龍さんの頭部があつた場所を弾丸が通り過ぎていった

「
」
ツ！」「」

「ぬうおおおおお！」

黒龍さんは転がる

「危ねえ！やばい！鍵がなければ、俺の頭部がトマト的なことに！」

「いや、顕現しているから殴られたぐらいの衝撃しか、来ないですよ」

僕はそう言ったけどを無視された

黒龍さんは起き上がり、撃つた方を見る

「峰理子！」

そこには全体的に若干黒い（肌も服装も）峰理子がいた

理子は拳銃を俺の方に向けて、銃口から煙を出している

「あれ？外しちゃった？」

「しゃあああああ！」

則次火焰さんが峰理子に突っ込む

「おい！策もなしに突っ込むな！」

「大丈夫でしょう、ほら」

僕は則次火焰さんの方を指差す

キーン！ダダァン！ギュイン！

空中で見事に空中戦を繰り広げている

「・・・じゃ、大丈夫かな」

僕はそのまま、立っていると黒龍さんは刀の手入れを始めた

「あれ？『武装顕現（b y琥珀さん）』じゃないんですか？」

前はバンバン使っていたのに

「ほら、流石に人の作品のだし、あんまり使わない方がいいかな？
って思ってたな」

「そうですね」

黒龍さんの手入れも終わり、僕は何をしようかなって思っていると

「うおっ！」

ドオン！

黒龍さんの隣に則次火焰さんが墜落してきた

「いてて・・・」

押し気味だったのに何があったんですか？

そう思つて上を見ると

「なっ!?!」

理子が三人に増えていた

・・・そうか・・・やっと、暴れられる

「一人一体つてことですかね？」

292

《Blast mode》

《Blade mode》

僕は変身無しで剣状態の携帯と銃状態の携帯を召喚する

「んじゃ、俺も本気だ」

則次火焰さんも左手のバタフライナイフをマッドブラックのD

DE
デザートイーグル

に変える

「はあ、戦いたくないんだけどな・・・」

黒龍さんは嫌々刀を二本取り出す

「よっとうっ!」

「やあっ!」

「オラア!」

僕達は同時に飛び、僕は左の理子の所に行く

あ、そうだ、意味無いけど翼を付けてみよう

バサア!

僕の背中から天使のような羽が出る

・・・やはり、垣根さんは最高である、空にいる間は付けと

「こんにちは」

僕は爽やかな声で言う

「お、爽やか系！」

この理子は右目にモノクルをしている、おそらく、僕の本当の姿を見ているのであろう

・・・ま、いいか

「どうもありがとう」

ダァン！　ダァン！

僕はあいさつ代わりに水色の弾丸を二発撃つ

だが、かわされる

そのまま、剣を理子に向かって振るが避けられる

「無駄無駄」

「うーん、難しい・・・」

「ブ・チ・コ・ロ・シ確定じゃあああああ！」

後ろからむぎのんの名言が聞こえたが意図的に無視した

「はあっ！」

僕は剣を振るうが

「やあっ！」

キーン！

理子の髪で操ったナイフで防がれる

「よっ」

僕は再度、剣を振る

ギギキツギギキツギキーン！

しばらく、鏝迫り合いをし、同時に離れる

「ちよっと、乗ってきたな」

僕の中でテンションが少しずつ上がっていく

「さあ！いっくよ〜」

理子が銃を撃ちながら、こっちに突撃する

「その程度で僕を止められると思うなよ！」

僕は剣で弾丸を弾きながら、理子に向かって突撃する

ガキーン！

僕の銃が理子のナイフに当たり、僕の剣が理子の銃に当たる

「くっ！」「くっ！」「くっ！」

二人同時に離れる

「くっ！どつやらの技を使っしかないようだ！」

《Blade mode》

僕は銃状態の携帯を剣状態にする

「織塵爛流剣術、轟靄派秘奥義・・・X狩刃　ッ！」

「厨二くせええええ！」

後ろから黒龍さんのツツコミが聞こえたが無視した

剣をクロスさせる、すると刃が光り出し、Xの光線が飛ぶ

「おおっとお！」

理子はその光線を避ける

「ま、当たらないのはわかっていただけだね」

僕は理子の頭上まで移動してからかかと落としを食らわせようとしたが

「甘いつー！」

だが、理子に受け止められ、吹っ飛ばされる

「うっ！」

地面に背中を打ち付け、口から声がもれる

立ち上がると理子は上から僕の方に凄いスピードで迫ってくる

「りっりりこにしてやんよ」

「ごめんね、僕、白雪派なんだ」

ヤンデレ巨乳って最強じゃない？

もちろん理子も好きだけどあ、でも、レキヤジャンヌもいいな

僕はそう思いながら、理子の顔面を蹴る

「みぎやー！」

理子は顔を（×）（×）にしてぶっ飛ば

『いや、お前好きじゃないんかい!』

それはそれ、これはこれ

ダックダーク・・・いや、変だな

「お前のすべてを暗黒に塗りつぶしてやるよ、俺の心のようにな」

決まった・・・

「何かへん」

まさかの理子にツッコまれた!

「うるさい!」

ドガァ!

僕は渾身の蹴りを打ち込む(やつあたり)

だが、避けられてしまい、すぐ傍の壁に足がめり込む

「よいしょつと」

僕は壁から足を引き抜き、理子に向き直るまあい、そう思って理子に向き直る

そんな時、どこからか声が聞こえた

『そんな力オスで大丈夫か？』

エルシャ イ、発売されて結構経つけど、まだ使っんだ

でもまあ、流石に言う人は・・・

「大丈夫だ！問題ない！」

居たよ・・・

「黒龍さん！ネタはいいから真面目に戦ってください！」

僕はそう叫び理子がいる上空に飛んだ
もちろん羽を出すのを忘れない

さて、どうしようかな……あ、そうだ

《Blast mode》

ダダダダアン！

僕は牽制として四、五発、理子に向かって発砲する

弾丸はすべて理子の顔ギリギリを通る

「きゃっ！危な……」

そして、弾丸を目で追った理子に一気に近づき、剣で左上から袈裟斬りにする

ギーン！

銃で防がれたようだ、だが！

「よっと！」

「ッ！」

そのまま、体を傾け、時計回りに回転し、後ろ回し蹴りを繰り返して見事に当たる

「きゃあー！」

理子は大きく吹っ飛ぶ

ドオン！

そのまま、理子は近くにあった壁に叩きつけられた

「くっ、くのっ」

《Blast mode》

抜け出そうともがく理子を見ながら口元に笑みを浮かべ、
二丁の銃を構えて引き金を引きながら、絶対死の魔法を言う

「『絶対死の氷結領域』」
エターナル・フォース・プリザード

『Freezing!』

ダダアン！

青い弾丸が理子に向かって飛ぶ

ヒュイン！ピキィ！

銃弾が当たった足が凍りつく

「えっ！」

「・・・愉快的オブジェにしてやるよ」

ダダダダダダダダアン

ドンドン着弾し、理子の全身が凍りつく

それを見て僕は二丁の銃口をギリギリまで近づけて、構えなおし、撃った

「バーン」

『Explosion!』

デュアン！

僕の銃からひとときわ大きい青い弾丸が発射され
壁で凍っている理子に向かって飛んでいく

パリン！

「くっ！」

理子が氷を破って身体の氷を振り払う

「・・・え？」

理子が眼前に迫っている弾丸に気づく、だけど、もう遅い

「バイバイ」

ドオオオオオオオオオオ！

僕の視界が青く染まる

青い爆発が消えた後、理子の姿は消えていた

「よっよ」

僕は地面に降りて、翼を仕舞う

「そっちも終わったか？」

後ろを見ると則次火焰さんがいた

「はい、終わりました」

「じゃ、最後を黒龍だけだな」

パン！

銃声が聞こえた方を見ると黒龍さんがいた

「終わりましたか？」

「こっちは終わったぜ」

僕達は声をかける

「俺が一番最後だよ」

「そのようですね、それでは帰りますか」

「そうだな」

黒龍さんが自転車に乗ると僕は話しかけた

「今度会うときは戦う時です・・・失礼しました」

そう言って僕は秋田にレポートした

トーン

自分が歩いてきた道に着地する

ピロリン

「あれ？メールだ」

僕は携帯を開ける、黒龍さんからだった

「・・・え、いわなきやいけなのかな？」

仕方ないな、っと僕は眩き、画面を見た

「本日は『とある作家の作品戦争2 未元定規編』を見ていただき、
ありがとうございました、次話は則次火焰さんの視点でお送りしま
す」

エル・プサイ・コングルウ

黒「いやっほう！前回で終わりと思ったか？まだまだ行くぜ！」

則「次は僕ですか」

黒「そうですね！正直一番早く書けました
逆に今回の話は一番長くかかりました」

未「え、そうなんですか？」

黒「はい、ネタを大量に入れたらとんでもないことになりました」

未「そういえば、前回、僕は『メキドフレイム』派って言ったんで
すけど・・・」

黒「すみません！何か未元定規さんには属性がついてしまいました
氷属性になつてしまいました！
弾丸の色も青いですし」

未「そうなんですか」

黒「すみませんでした！」

則「次回の更新はいつになるかは分かりません」

未「それでは次回をお楽しみに！」

とある作家の作品戦争2 〵則次火焰編〵（前書き）

二度と視点分けなんてしねえと思う今日のこの頃

今年最後のカオス

ゆっくりしていったね！

とある作家の作品戦争2 〳〵則次火焰編〳〵

「大丈夫だ！問題ない！」

「黒龍さん！ネタはいいから真面目に戦ってください！」

いきなりボケた黒龍に未元定規が突っ込む
少し前に戻るぜ

「くあ〜」

俺は大きなアクビをしながら家に帰宅していた

ぷるるるるるる、ぷるるるるるる

「あ？電話？」

俺は携帯を持っていない
作品投稿はDSでやっている

………ってことは

俺は学ランのポケットに手を突っ込む

「やっぱりか……」

俺のポケットの中に携帯が入っていた

めんどくせえ……

そう思いながらも携帯を開く

「………やっぱ、指令か」

指令、このサイトに登録している作家に送られるメールだ
作家に対してある指令を送ってくる

そしてこっちの都合を考えているのか、学校ではならない

ま、指令はつけなくてもいいんだがな、と思いながらメールを開く

「えーっと『バグキャラを削除せよ、場所は……』……熊本か」

三人だけだし、行くか

俺は周りに人がいない事を確認し、熊本に向かって飛ぶ

ドオン！

・・・数分後

「ウオオオオオオオオ・・・！」

やばいつ！勢いつけすぎた！

ドオオオオオオオン！

「うおっ！」

「何ですか！？」

「いてて・・・」

頭を押さえながら土煙の中から出る

いてて、肉体強化してて、よかった

「ん？あ、お前らが残りの二人か？」

三人と書いてあったのでこいつらが残りの二人であろう

俺から向かって右に居たのは180cm近くあり、少しツンツンした髪に服装は俺と同じ学ランを着ている男と

身長は165cm前後の紺色ブレザーに赤色のネクタイの男

とりあえずは自己紹介だ

「俺は作者ID172961、

則次火焰、中三だ」

「あ、僕は作者ID166362、未元定規、中二です」

「俺は作者ID166151、

黒龍、高二だ」

ふむふむ、右が黒龍で左が未元定規ね、

簡単に自己紹介を済ませ、黒龍は俺に聞く

「そついやあ、何で上から落ちてきた？」

「ん？ああ、空を飛んで来ようと思ったたら、勢いをつけすぎてな」

勢いつけすぎたな

「お前、こいつみたいにテレポートしろよ」

黒龍さんは未元定規を指さし、言う

「あ、その手があったか！」

次からはそうしよう

「まあいい、っで？バグキャラはなんだ？」

『バグキャラ』

既存する作品のキャラクターが三次元に現れて、三次元を破壊しようとする奴等

性格も口調も違うし、なんか黒いし、力は強いし、嫌なんだがね

『違うからな！口調が違ってるのは、仕様だからな！』

はいはい、そういう事にしてやるから

「え〜っと『緋弾のアリア』の峰理子ですね」

未元定規は携帯の情報を見ながら言う

「っていつか、まだ出てこないな、何でだ？」

フィールドには運営が結界を張っていて、人は俺等以外誰もいない

「そうですね、一応^{セット}顕現しておきますか」

二人が携帯を構えたので俺も携帯を構える

「^{タイトル}題名『とある科学とテストと召喚獣』、^{キャラクター}主人公『黒崎龍也』、^セ顕現^{セット}」

黒龍の姿が髪が銀色になり長髪になる、身長は少し低くなり服が文月学園の制服に変わる

「^{タイトル}題名『この作品は削除されました』、^{キャラクター}主人公『不音龍一』、^{セット}顕現^{セット}」

未元定規の姿がキンジに近い姿になり、服が赤色のブレザーに青色のネクタイになっていた

「タイトル題名『僕と幼馴染と召喚獣』、キャラクター主人公『橘侑』！セツト顕現！」

俺の姿が橘侑の召喚獣の装備になる

「って、お前もキンジ装備かい！何やね、どんだけ、『緋弾のアリ』好きなんじゃない！って、今回の敵も緋弾やし！」

黒龍が方言でツツコむ

「別にいいだろ」

「って、黒龍さんも双剣ダブル使ってたじゃないですか」

俺はそう言う

「ちがうもーん！俺は双剣じゃないもーん、二刀流だもーん」

・・・あれ？確か・・・

「黒龍さん、二刀流のことをダブルって言うんですよ」

「なにぃ！？」

アリアも二刀流だしな

「チクシヨウ！絶対に二丁拳銃は使わん！」

黒龍はそう言う、すると

チャリン

黒龍が鍵落とし、その鍵を拾おうと姿勢を下ろすと

「おっと、あぶな・・・」

チュイン！

黒龍の頭部があった場所を弾丸が通り過ぎていった

「「ッ！」」

「ぬうおおおおお！」

黒龍は転がる

「危ねえ！やばい！鍵がなければ、俺の頭部がトマト的なことに！」
「いや、顕現しているから殴られたぐらいの衝撃しか、来ないですよ」

未元定規はそう言うが無視された

黒龍は起き上がり、撃った方を見る

「峰理子！」

そこには全体的に若干黒い（肌も服装も）峰理子がいた

理子は拳銃を黒龍の方に向けて、銃口から煙を出している

「あれ？外しちゃった？」

「しゃあああああ！」

俺は銃とナイフを構えて理子に突っ込む

「おい！策もなしに突っ込むな！」

黒龍がそういうが無視して突っ込んだ

「よう、峰理子、早速だが削除させてもらっせ

「うゝ熱血は嫌い！」

俺はナイフを振るって銃を撃つ

キーン！ダダァン！ギューン！

「うゝん、後ろの二人が暇そうだね、えいつ！」

「なっ！？」

理子が突然三人に増えた

「「「一回下がってもらっね！」「」」

三人同時に俺の腹を蹴る

「うおっ！」

ドオン！

黒龍の隣に落ちる

「いてて・・・」

めっちゃめっちゃいてえ・・・

俺は腹を押さえながら起き上がる

「な！？・・・」

皆気がついたようだ

確かに難しくはなったが・・・

「一人一体ってことですかね？」

《Blast mode》

《Blade mode》

未元定規は変わった剣と銃を召喚する

「んじゃ、俺も本気だ」

俺も左手のバタフライナイフをマッドブラックのDデザートイーグルに変える

「はあ、戦いたくないんだけどな・・・」

黒龍は嫌々刀を二本取り出す

「よつとっ!」

「やあっ!」

「オラア!」

俺達は同時に飛び、俺は真ん中の理子の所に行く

「よう、またあつたな」

「うっ、あの子がよかった!」

そついつて理子は未元定規を指差す

「残念だったな」

ダダァン！

俺はあいさつ代わりに理子に向かって二発撃つ

だが、かわされる

「無駄無駄」

「チツ、めんどくせえ・・・」

「ブ・チ・コ・ロ・シ確定じゃあああああ！」

後ろから妻野の名言が聞こえたが意図的に無視した

「よっ」と！

僕は足で理子の顔面を狙うが

「くうっ！」

ガッ！

理子に右手で防がれる

ダダァン！ダァン！

その隙について俺は銃を三発ほど理子に撃ち込むが

ギギイン！キン！

髪の手で防がれる

「チッ」

理子の顔を踏み台にして、同時に離れる

「みぎやつー！」

『・・・ひでえ』

まあ、気にすんな

「織塵爛流剣術、轟靨派秘奥義・・・X狩刃　ッ！」

「厨二くせえええええ！」

後ろから未元定規のボケと黒龍のツツコミが聞こえたが無視した

「おっと、よそ見はダメだよ！」

気が付いたら理子が俺の眼前に迫っていた

「くっ！」

俺は銃の持ち手の所は理子にぶつける

「きゃっ！」

さあって、どうしようか・・・お、そうだ

俺は銃を水平に構えて言った

「『ガトリング・フレイルム炎の連弾』」

ガガガガガガアウン！

俺の銃の銃口から炎の弾丸が連続で飛び出す

「きゃっ！熱い！」

理子は避けるが髪や服が数ヶ所、焦げる

「……じゃ熱うっ！」

そうしたら理子の後ろに居た黒龍に当たった

「わり」

俺は謝る

「お前かい！」

黒龍は俺に向かって怒鳴る

しかし、ま、いいか、という顔をして、黒龍は自分の理子に向き直る

その時、声が聞こえた

『そんなカオスで大丈夫か？』

エルシャ イ、発売されて結構経つが、まだ使われていたのか
でもまあ、流石に言う奴は・・・

「大丈夫だ！問題ない！」

居たよ・・・

「黒龍さん！ネタはいいから真面目に戦ってください！」

未元定規はそう叫び、理子がいる上空に飛んだ

あれ？羽が付いてる

・・・あ、垣根の羽か

「俺はどうしようかな？」

ダダダダダァン！

俺は牽制として四、五発、理子に向かって発砲する

「やあっ！」

ギギギギギン！

理子はナイフで防ぐ

このままだとジリ貧だな

「くっ、はあああああ……」

その時、理子の周囲に黒いエネルギーが集まっていく

「……吸収……圧縮……固定」

ジジ、ジジジジ、ジジジジ

理子の手の中に黒い塊が出来る、小さな雷球のようだ

「ハアッ！」

「ッ！」

ドオン！

俺は向かって黒い弾を放つ

その球体は同じ形状を保ち、俺に向かって飛んでくる

球体は半径1mの範囲の物を抉りながら進んでくる

「うおっ！」

俺は大きく飛ぶ

ドオン！

そのまま、近くにあった壁に撃ち込まれ、消えた

「何だ、あの技は？」

バグ技か？

理子はまた力を溜めている
だが

「悪いな、二度目はないぜ」

俺は二丁の銃を構えて引き金を引きながら言った

「『絶対死の紅蓮炎球』メキド・フレイム」

ドオオン！

銃口から巨大な赤い火球が理子に向かって飛ぶ

「・・・え？」

「おせえ」

火球が理子に当たり、理子の全身を包み込む

大きな音も無く、ただ静かに燃え続ける

『絶対死の紅蓮炎球』
メキド・フレイム

特に派手な技ではない

この炎球に入った対象はただ骨も残らず燃やし尽くすだけ
声も出せず、息も出来ない空間で燃えるだけ

「チェックメイト」

俺は銃をしまう

その瞬間、炎球が灰の一つも残さず消え去った

ドオオオオオオオオン！

大きな音が聞こえた、おそらく誰かが大技を使ったんだろう

すると、上から未元定規が下りてきた、おそらくさっきの爆発はこいつだろう

「そつちも終わったか？」

すると、未元定規がこつちを向く

「はい、終わりました」

「じゃ、最後を黒龍だけだな」

パン！

銃声が聞こえた方を見ると黒龍がいた

「終わりましたか？」

「こつちは終わったぜ」

俺達は声をかける

「俺が一番最後かよ」

「そのようですね、それでは帰りますか」

「そうだな」

黒龍が自転車に乗ると未元定規は話しかけた

「今度会うときは戦う時です・・・失礼しました」

そう言って、未元定規は消えた

なるほど、ライバルという奴か！

ま、いいや、とりあえず修復をしなければ

俺は携帯を操作し、破損した所やクレーターなどを直す

「じゃ、俺もさいなら！」

ドーンッ！

俺は地面を思いっきり蹴って飛ぶ

高度3000m上空

「……あ、テレポートするんだった」

ヒュン！

飛んでいる最中にテレポートを使い、地面に着地する

ピロリン

「あ？メール？」

俺は携帯を開ける、黒龍からだった

「……え、言わなきゃいけないのか？」

仕方ないな、っと俺は眩き、画面を見た

「本日は『とある作家の作品戦争2 則次火焰編』を見ていただき、
ありがとうございます。参戦したい方はいつでも黒龍に申し込み
をお願いします」
次のカオスは未定です」

Good
bye!

とある作家の作品戦争2 〱則次火焰編〱（後書き）

雑談？

黒「はい！つというわけで今年最後のカオスでした！」

未「そうですね・・・あれ？則次火焰さんは？」

黒「ああ、受験生だからね、帰っちゃった、今頃受験勉強中じゃないかな？」

未「そうですね、大変そうですね」

本編について？

黒「二度と視点分けなんてしねえ」

未「まあ、気持ちも分かりますけどね」

黒「今度から戦いは一話で終わらせよう、うん、決定！」

則「（ガチャ）お邪魔します」

未「あれ？則次火焰さん？勉強は？」

則「流石にいないと会話が進まないだろうと俺を送ってきた」

黒「受験、頑張ってください！」

本編について？

黒「というわけで隠れた強者、則次火焰でした」

則「何か恥ずかしいですね」

未「戦闘も一番早く終わっていますね」

則「あ、本当だ」

黒「なんか、皆で居るときはおちゃらけているけど、戦ったら実は強いをイメージして書かせて頂きました」

未「それに属性は火ですか」

黒「はい、その辺については次の話で書きます」

次回作

黒「実は次回作のテーマは決まっています」

未「そうなんですか？」

黒「はい、後は参加者だけです、まあ、書くのは来年になりますが」

則「多分俺は参加できません、受験生なんで」

黒「頑張ってください、合格した場合は是非連絡を！盛大に祝います！」

未「僕は決められないんで僕オリジナルに聞いてください」

雑談？

未「何か、あとがきながすぎませんか？」

黒「何を言っているんですか？タグにも書いているでしょう」『後書きに命かけてます』って」

則「それにしても長くないですか？」

黒「次で最後ですから、(ここまでの執筆所要時間25分)」

最後に

黒「これからもこの作品をよろしくお願いします!」

未「次話は僕達の設定です」

則「さようなら!」

とある作家の詳細設定（前書き）

催促されたので書きました（ ）

とある作家の詳細設定

名前

『黒龍』
くろりゅう

・職業

『学生（高校二年生）』

・身長

『180cm前後』

・性格

『面倒くさがり屋』

『普段はポケだがカオスではツッコミが多い』

・割合

『ポケ4 ツッコミ6』

・攻撃系統

『足技重視』

・必殺技

『絶対死の超雷撃砲』
ライトニング・スパーク

・属性

『雷』

・イメージカラー

『黒』

・容姿

『黒く少しツンツンした髪で少しがっしりした身体』 『死んだ魚の
ような目』

・顕現容姿

『黒崎龍也』 C V指定なし』

・顕現武装

『特になし』

・服装

『黒の学ラン』

・名前

『ダークハート
未元定規』

・職業

『学生（厨・・・中学二年生）』

・身長

『165cm前後』

・性格

イメージ

『天然、厨二病、本人は真面目だがボケっぽい』

・割合

『ボケ5・ツツコミ5』

・攻撃系統

『足技重視』

・必殺技

『絶対死の氷結領域』
エターナル・フォース・ブリザード

・属性

『氷』

・イメージカラー

『青』

・容姿

俺のイメージ

『文学少女の井上心葉』

・顕現容姿

『緋弾のアリアのキンジの不良版』

『服装は11eyesの制服』

『CV岡本信彦』

・顕現武装

『武器変形携帯（複数所持）』

・服装

『紺色のブレザーに赤色のネクタイ』

・名前

『のりつきかえん
則次火焰』

・職業

『学生（中学三年生）』

・身長

『170cm前後』

・性格

イメージってというか、勝手に決めた
『行動力が高いが状況によってかなりのバカになる』 『かなりハイ
テンションなボケをかます』

・割合

『ボケ7・ツッコミ3』

・攻撃系統

『足技重視』

・必殺技

『絶対死の紅蓮炎球』
メキド・フレイム
『煉獄火炎でも可』

・属性
『炎』

・イメージカラー
『赤』

・容姿
『長めの黒髪で平均よりはがっしりした身体』

・顕現容姿
『変更点なし』

・顕現武装
『バタフライナイフ』
『ベレッタM92F』
『D・E』デザートイーグル

・服装
『黒の学ラン』

とある作家の詳細設定（後書き）

黒「というわけで設定です」

未「すいません催促してしまつて」

ゆ「気にしないでいいよー」

則「誰!？」

黒「まあ、気にすんな」

未「最近ニコニコネタが多くないですか？」

黒「それも気にしない方向で」

則「分かりました」

未「僕の職業の（厨・・）ryについて」

黒「さて、次回作の細かい設定ですけど」

未「無視ですか」

黒「ある方からありがたいアイデアを頂きましたのでそれにします

先に参加者だけは決めようと思ったので応募します

応募方法は俺に『参加します』と書いてください
作品を複数所持している場合は一つに決めて応募してください、
ちなみにオリ主限定です」

未「現在の参加者は一名です」

黒「さて、ネタが無いのもうそろそろ終わりますか」

則「それでは・・・」

ゆ「また来てねー」

黒・未・則

「取られた!」

リア充なんて爆発しろ！俺達のブラッド・クリスマス（前書き）

ジングルベル〜ル〜

ジングルベル〜ル〜

鈴が〜なる〜

今年で、何年目でしょうか？

リア充なんて爆発しろ！俺達のブラッド・クリスマス

「一人きり！」

黒「はい、よく分からないシャウトで始めました

黒とダークで暗黒ラジオ
今回が第一回放送です」

未「何ですか？これ」

黒「今回のテーマは『リア充なんて爆発しろ！俺達のブラッドクリスマス』です」

未「無視ですか」

黒「分かりましたよ、今回は何かをやるうと思っていただけ、全く思い付かなかったんで、・・・そうだ、ラジオをしようって思っています」

未「なぜ、ラジオに行きつくのかわかりませんがいいでしょう」

くくく・・・前の垢の時に名乗っていたにじファン異端審問会会長の血が疼くぜ」

黒「会長でしたか、頼もしいですね

それでは行きますか（ガタツ）」

未「え？どこにですか？」

黒「ほら、今回はクリスマススペシャルなのでサンタ服着てるじゃないですか」

未「え？ああ、そうですね、白いサンタ服なのか分かりませんが」

黒「さあ！皆！得物の準備は出来たか！」

F「イエエエエエッ！」

未「うわっ、びっくりしたFFF団だ、何で皆、白サンタ服？」

黒「さあ！皆のサンタ服を裏切り者の血で真っ赤に染めようじゃないか！」

未「そういうことが・・・分かりました僕も（ガタツ）参加しま・・・」

黒「あ、未元定規さん、そこにあるピンマイクを付けてください」

未「・・・・・・・・あ、これですか・・・・・・・・よし付いた」

黒「よし、それじゃ、行くぜ！」

全「オォー！」

ガシャーン！

？「だ、誰だ！」

黒「被告人の罪状を！」

F「はい！根本恭二（以降この者をカスとする）はCクラスの代表の小山（以降この者を乙とす）とカスは聖夜に仏教徒の教えに背く事を……」

未「前置きはいいです完結に」

F「ハッ！クリスマススイブに彼女とイチャイチャしていたので羨ましいのであります！」

未「うむ、実に分かりやすい」

黒「各々武器は構えたか？」

F「サー！イエッサー！」

根「……じ、情状酌量の余地は……？」

黒「……G O Y O U H E L L（にこやかに親指で首をきる）」

根「ぎゃあああああああああ………」

黒「ふう（ガタツ）終わりましたね」

未「そうですね（ガタツ）「疲れましたよ」

黒「あ、ピンマイクは切っていいですよ」

未「「え？あ……」（カチツ）すいません」

黒「いえいえ、お気になさらず」

未「ところでもうどうするんですか？」

黒「そうですね、見事に真っ赤に染まりましたし、もうネタもないですね、何をしますか、おっと、そろそろお時間です」

未「え？もうですか？」

黒「ええ、それでは今日はこのへんで」

未「ありがとうございます」

黒「あ、未元定規さん、この後予定ありますか？」

未「ん？いえ、何もないですよ」

黒「でしたら、Fクラスに行きましょう！」

未「え？いいですけど」

黒「じゃ、行きますか」

未「はい、……あ、黒龍さん、マイク切れてないですよ！」

「(ミミズ)・(ミミズ)」

リア充なんて爆発しろ！俺達のブラッド・クリスマス（後書き）

作「皆々準備は出来てるか？」

黒「おう、出来てるぜ」

坂「つてか、お前も手伝えよ」

作「仕方ないだろ、ラジオ中だったんだから」

未「あの〜？本当に僕も参加していいんですか？」

黒「あ、未元定規さん、こんばんは」

未「こんばんは」

坂「別に良いだろ、おーい、イルミネーション足りねえぞー」

霧「・・・これ」

坂「おう、わりい・・・何で翔子がいる」

霧「誰でも参加していいって言われたから」

吉「まあまあ、皆で楽しもうよ」

姫「明久くん」

吉「ん、何？姫路さん」

姫「ケーキを作ったんです食べてください」

吉「……あ、後で皆で食べようか」

上「ギャハハハハハハ！」

御「アハハハハハハハ！」

一「……………（トナカイのコスプレ）」

鉄「おい、ケーキ買ってきたぞ」

高「あんまり騒がないでくださいね」

坂「よし、皆クラッカーは持ったか？……よし、行くぞ……3
2・1」

全「メリークリスマス！」

クリスマスパーティー（前書き）

前回の後書きの続きです

クリスマスパーティー

全「メリークリスマス！」

作「ケーキ取って」

吉「僕も」

未「あ、僕もいいですか？」

姫「あ、はい、どうぞ」

作「サンキュー」

吉「ありがとう」

未「ありがとうございます」

パクツ x 3

作吉未「ぐはっ！」

姫「ど、どうですか？」

吉「……と、とても美味しいよ……」

作「……さ、流石だな、ガタガタ姫路」

未「……とても美味しいです（ガクガク）」

一「ジュース取ってくれエ」

久「あ、どうぞ」

一「サンキュー、久保」

久「あれ？トナカイのコスプレじゃなかったかな？」

一「あいつと変えた（サンタのコスプレ）」

御「アハハハハハハ！（ミニスカサンタ）」

上「……………（トナカイのコスプレ、赤鼻付き）」

久「そうか、一方通行君は色白だから似合うね」

一「嬉しくねエけどなア」

久「君も苦勞しているね」

「お前もなア」

久「そうかな？（トナカイのコスプレ）」

工「ムツリニくんこれ、どうかな？（ミニスカサンタ）」

土「・・・別にどうもない（ポタポタ）」

工「嘘つき〜えいっ（ぴらっ）」

土「卑怯な！（ブシャアアアア・・・）」

霧「・・・雄二」
ミニスカサンタ

坂「まで、翔子、なぜトナカイの衣装を持って俺に近づいてくる」

霧「・・・サンタとトナカイはワンセット」

坂「まあ待て、俺はすでにサンタの服を着ているし、その方がセツトみたいでいい・・・はっ！」

霧「・・・雄二」

坂「違うぞ翔子！今のは言葉のあやで・・・」

霧「・・・嬉しい」

坂「うおっ！くつつくな！」

姫「あ、明久君！この服どうですか！（胸元の大きく空いたミニスカサント服）」

吉「ぐはっ！・・・と、とても可愛いよ、姫路さん」

姫「ほ、本当ですか！・・・はふう、よかったです」

秀「中々似合っておるぞ、姫路（男性用サント服）」

吉「あれ？秀吉、男性用でいいの？」

秀「待つのじゃ明久、ワシはミニスカなんぞ、絶対に着ぬぞ」

土「・・・なんてことだ！」

吉「ムツツリーニ、血涙まで流さなくても・・・」

土「・・・だが、姫路の写真が、撮れたからいい・・・」

吉「4ダース貰おう・・・あれ？工藤さんの写真は売らないの？」

土「・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・」

・非売品」

吉「……ほじほじ」

土「……（ブンブンッ！）」

鉄「学生時代を思い出しますな」

高「そうですね〜……皆騒いでいますけどいいんですか?」

鉄「今日ぐらいは多目に見ましよう、クリスマスなんですから」

高「そうですねか……あら?それは……」

鉄「今日ぐらいはいいでしょう勤務中じゃありませんし」

高「……そうですね、クリスマスですもん」

ポンッ

鉄高「乾杯」

御「ねえ、当麻」

上「ん?何だ?」

御「これ、どう思うかな？（ミニスカサント、帽子付き）」

上「散々、俺で笑っておきながらか・・・まあ、可愛いと思っぞ」

御「ほんと!？」

上「嘘ついても仕方ないだろ・・・ほらっ」

御「え・・・?何？」

上「プレゼント、安いので悪いがな」

御「わ、手袋だ・・・」

上「悪いな、そんな物しか用意出来なくて」

御「ううん、嬉しいよ!」

作「もうすぐだな・・・未元定規さん、ちょっといいですか？」

未「むぐっ?・・・なんですか？」

作「最後に皆にプレゼントを贈るんで・・・いいですか？」

未「・・・なるほど、分かりました、行きましょう」

学校の屋上

作「じゃ、やりますか」

未「早く顕現セツトしましょう」

作「しまった、龍也が外にいるからセツト出来ない」
未「じゃあ、どうします?」

作「別に大丈夫ですよ、耐久力が低くなるだけですから」

未「そうですか………じゃあ、行きますよ?」

作「はい!」

未「『絶対死の氷結領域』!」
エターナル・フォース・ブリザード

作「情報変換!
『ホワイト・クリスマス聖夜の奇跡』!」

吉「わ、雪だ！」

姫「うわ〜綺麗です」秀「ホワイトクリスマスじゃな」

坂「ほう」

霧「・・・綺麗」

一「・・・あいつらか」

上「最高のクリスマスだな」

未「最高ね」

工「ムツツリーニ君、大丈夫？（膝枕）」

土「・・・我が生涯に一片の悔いなし」

黒「・・・全く」

作「よし」

未「出来ましたね」

作「じゃ、締めの一言、いきますか」

未「はい」

『Merry Christmas!』

クリスマスパーティー（後書き）

最近本編書いてないな

Bクラス終戦後（前書き）

ひさしぶりの本編、頑張るぞ〜

Bクラス終戦後

「明久に龍也、随分と思いきった行動に出たのう」

終戦後、Bクラスにやってきた秀吉に、そんなことを言われた

「うう・・・痛いよう、痛いよう・・・」

「大丈夫か？明久？ほらっ手を出せ」

俺は明久の手に湿布と包帯を巻く

「なんとも・・・お主らしい作戦じゃったな」

後のことを考えずに自分の立場を追い詰める、男気溢れる素晴らしい作戦だね（遠い目）

結構デカイ穴が空いているな、まあ、それと・・・

俺は完璧に割れたガラスを見る

「・・・木原先生、窓は開けていたはずですが？」

「こまけえ事、言つなよ、俺が弁償すりゃあいいんだからな」

「チツ、何やってんだア・・・親父」

ちなみに一方通行は木原先生と義理の親子である
身寄りのない一方通行を木原先生が引き取ったのだ

「俺を親父と呼ぶな！・・・・・・・・・・・・・・・・PAPAと
呼べ」

「きめエ」

ガッ

木原先生の脛を一方通行が蹴る

そんな仲良しな二人を置いといて俺は雄二達の所に行った

「ば、馬鹿なことを言つな！この俺がそんなふざけたことを・・・」

ボロ雑巾が女装させられそうになっていた

「はあ？似合ってるんじゃないか？ボロ雑巾」

「お、お前は！黒崎！」

「……俺の名前を呼ぶな、虫酸が走る」

そうすると、雄二が当麻の方に近づいていった

「……なあ当麻、なんで龍也はあんなに根本を毛嫌いしているんだ？」

「ああ……中三の時に根本に喧嘩を売られてな、圧勝して根本が『すいませんでした！ボロ雑巾とでもなんでも呼んでよろしいので見逃してください！』」

つて言つて見逃したら、後ろからナイフで刺されそうになって、龍也がぶちギレてボロボロにしたのが始まりだな」

「なるほどな」

「……うわっ、根本最低」

女子の一人が言う

それを皮切りに教室全体に広がっていく

「最低だな」「キモい」「代表変えた方がいいんじゃないわ?」「もう、付いていけないわ」

信頼度は0になったみたいだな

「……でもさ、女装はやりすぎかな?」

Fクラスの一人が言う

「確かになあ」「人生終わりそうだしな」「俺もしろって言われたら自殺するもん」

やっぱり、良い奴らが多いなFクラスは……だが

「なあ皆、知ってるか?」

『?』

Fクラスの連中は首を傾げる

「……ボロ雑巾には………彼女がいる」

『なに!』

「それはCクラス代表の小山だ」

『なにいいいいい!』

「しかも・・・手作りの弁当を作って貰っているそうだ」

『なゝあゝにゝイイイイイイイイイイイイ・・・』

Fクラスの面々は一瞬でFFF団の姿になった

「判決」

『『私刑、女装写真撮影+校内徘徊の刑に処す』』

「ま、待て!情状酌量の余地を・・・ぎゃああああああああああ
あああ・・・」

ボロ雑巾の姿は消えた

ありがとうボロ雑巾、君のことは0.1秒は・・・あれ?何の話だ
つたつけ?

まあいいや、俺は抜き取っていた手紙を明久に渡す

「明久、姫路の鞆に入れといてやれ」

「え・・・う、うん!分かった」

明久が教室に向かう、俺はそのまま姫路に話しかけた

「姫路」

「あ、はい！・・・あ、あの・・・」

姫路が根本の方を見る

恐らく手紙が気になるんだろう

「姫路、Fクラスに行ってみろ、落とし物を明久が拾ったみたいだから届けにいったぞ」

その瞬間、姫路の顔が輝いたのは言うまでもないだろう

姫路がFクラスに向かい、俺はボロ雑巾を見る

「団長！このボロ雑巾の制服はどうしますか！」

「そうだな・・・カスには家まで楽しんで貰おうじゃないか、ゴミ箱だと見つかる可能性がある、焼却炉に放り込め」

『『『了解！』』』

その後、カスはFクラス二名に引きずられて行った

その後に教室に帰ったら雄二の教科書に卑猥な落書きがされていた

雄二が来る前に落とすの大変だったんだからな！

Bクラス終戦後（後書き）

作「久しぶりの本編だ！」

上「久しぶりだな、この空間は」

吉「そうだね」

作「残念ながら、忘年会はやりません！」

上吉「ええー」

作「番外編やり過ぎだ！・・・新年会はやるっか」

上吉「イエー！」

作「絶対にAクラス戦まで行く！年内に！」

吉「頑張ってください」

上「じゃ、次だ」

作「感想頂戴！お願い！」

心が折れそう・・・(前書き)

心が折れそう・・・

今年中にAクラス戦終了・・・きつい

心が折れそう・・・

Bクラス戦終了の二日後の朝、俺達は最後の作戦の説明を受けていた

「まず皆に礼を言いたい、不可能と言われていたにも関わらずここまで来れたのは、他でもない皆の協力があったからだ、感謝している」

雄二らしくないセリフ、雄二がここまで素直に礼を言ったのは片手で数えられるぐらいしかないだろう

「ここまで来た以上、絶対にAクラスにも勝ちたい、勝って、生き残るには勉強すればいいってもんじゃないという現実を、教師どもに突きつけるんだ！」

『おおーっ！』

『そうだーっ！』

『勉強だけじゃねえんだーっ！』

ここぞーっ、

皆はこの戦争に勝つために勉強をしていることに気が付いていない

「皆ありがとう、残るAクラス戦だが、これは一騎討ちで決着をつ

けたいと考えている」

先日の昼食時に聞いているので俺は驚かない

雄二が霧島と戦うのも知っている、だが、どうやって勝つのか分からない

相手はAクラス代表、戦力が違いすぎる

「馬鹿の雄二が勝てるわけなあっ!？」

「うわあっ!」

明久の頬をカッターがかすめて、俺の卓袱台に突き刺さる

「悪い、龍也」

雄二が謝る

「僕には!？頬を切られた僕には!？」

「次は耳だ」

このセリフを聞いた奴はとても友達には見えないだろう、けどな、親友なんだよ、これでも・・・

「まあ、明久の言うとおり翔子は強い、まともによれば勝ち目はない」

切られ損、明久、哀れな・・・

「だが、Dクラス戦でもBクラス戦でも同じだった、しかし、俺達は勝った、今回だって同じだ、俺は翔子に勝ち、FクラスはBクラスに勝利する」

そして、雄二は言う

「俺を信じて任せてくれ、過去に神童と言われた力を、今皆に見せてやる」

『おおお　　っ！！』

皆が右手を上げ、高らかに叫ぶ

「さて、具体的なやり方だが・・・俺は日本史でやるつもりだ」

日本史？霧島が苦手なのか？・・・いや、聞いたことないな、雄二

も得意科目じゃないし

「ただし、内容は小学生程度、上限あり、召喚獣ではなく純粹な点数勝負だ」

ミスした方が負ける、確かに勝ち目はあるかもしれないが・・・

妨害もあの霧島には通用しないだろうし、雄二が運に頼りきった作戦を立てるはずがない

「雄二、あまりもつたいぶるでない、そろそろタネを明かしても良いじゃろう?」

秀吉の言葉に全員が頷いた

「ああ、すまない、つい前置きが長くなった」

雄二はかぶりを振って、口を開いた

「俺がこの方法を探ったのは、ある問題が出たら、アイツは確実に間違えると知っているからだ」

ある問題？

「その問題は……『大化の改新』」

「大化の改新？……小学生だから、何年に起きた、とかか？」

「おっ、ビンゴだ龍也、お前の言う通り、その年号を問う問題が出たら、俺達の勝ちだ」

大化の改新……確か……645年だったっけ？

「大化の改新が起きたのは645年、こんな問題は明久ですら間違えない」

その時、明久を見ると顔を隠していた

「明久……ま、まさか」

「お願い……僕を……僕を見ないで」

聞かなかった事にしよう

そういえば……

「あの、坂本君」

「ん？なんだ姫路」

「霧島さんとは、その・・・仲が良いんですか？」

雄二は霧島のことを『翔子』とか『アイツ』と呼んでいた仲が良くなければそんな呼び方はしないだろう

「ああ、アイツとは幼馴染みだ」

「総員、狙ええっ！」

「なっ！？なぜ明久の号令で皆が急に上履きを構える！？」

よく見たら当麻も上履きを構えている

構えていない男子は俺と秀吉と一方通行だけだ

「黙れ、男の敵！Aクラスの前にキサマを殺す！」

「ま、待て！龍也はどうだ！？龍也は木下姉弟と幼馴染みだろう！もしかしたら木下優子といい仲間かもしれんぞ！」

雄二がそういつと半分がこちらを向いた

チツ、面倒な……

俺は攻撃体制を取る、すると、秀吉が言った

「いや、それはないの、すでに龍也は姉上にフラれておる」

グサツ！

その言葉は俺の心を見事に抉っていった

「いや〜見事なフラれ方であった『あたし、自分より弱い男は嫌いな』と一蹴されたのじゃ」

ドスツ！

「……………」

……声真似、してまで……言わなくても……いい

ガクン

「龍也？・・・雄二！龍也が灰になってる！」

燃え尽きたよ・・・真っ白に・・・

「龍也！目を覚ませえ！」

「・・・・・・・・あれ？おばあちゃん、何でそこにいるの？」

「三途の川を渡るうとしている！」

「起きろオ！龍也ア！」

「・・・・・・・・はっ！」

俺はいつたい何を・・・

「すまぬ、この話はタブーじゃった」

秀吉が謝る

何の話？何で俺寝てたの？

「・・・・・・・・とにかく！」

雄二が教卓に戻り、大声で叫ぶ

「・・・俺と翔子は幼馴染みで小さい頃に間違えて嘘を教えていたんだ」

ああ、確かそのへんからだっただな・・・何で皆、普通なんだ？FF
F団だったら雄二に襲いかかってもおかしくないのに・・・

「俺はそれを利用して、アイツに勝つ、そうしたら俺達の机は・・・」

『システムデスクだ！』

ねえ、俺が寝ている間に何が起こったの？

心が折れそう・・・(後書き)

作「gggggappg...jda5ajdqm5252dgggt」JW/4.
Mp、pg、Qteu...」

上「オイッ!どうした!?!」

吉「処理落ち、しかけている!」

作「mnronggappg...」はっ!」

吉「あ、戻った」

上「どうした?」

作「いやあ、キツくて・・・ま、いいや」

吉「いいんだ!」

作「次回、やっとAクラスに行くぜ!」

上「やっとか」

作「夏休みから始めて・・・約4ヶ月、やっとAクラスに!

Aクラス戦は結構オリでいくよ!

そしてオリキャラが登場!

しかも二人！さらに白黒と透明巫女もでるよ！」

上「誰だ？」

作「今日中に投稿する予定だからまたね！」

君の心にジャストミーツウ！（前書き）

起きたら11時30分、いそげえ！

君の心にジャストミーツウ！

「一騎討ち？」

「ああ、Fクラスは試召戦争として、Aクラス代表に一騎討ちを申し込む」

恒例の宣戦布告

今回は雄二、明久、俺、秀吉、姫路、ムッツリーニ、一方通行のメンバーで来た

「うーん、何が狙いなの？」

交渉しているのは優子……顔が見られない

「もちろん、俺達Fクラスの勝利が狙いだ」

優子が疑問なのも無理はない、下位の俺達が一騎討ちで霧島に挑むのは何か裏があると考えてるだろう

原作と全く同じなのでカット！……痛いっ、石投げないで！
時間が空いたら書きます

「でも、こちらからも提案、結構人数がいるし・・・九対九で5回勝った方が勝ち、っていうのなら受けてもいいよ」

「う・・・」

明久が声を漏らす

「なるほど、姫路が出てくる可能性を心配しているんだな、安心してくれ、うちからは俺が出る」

「無理だよ、その言葉を鵜呑みにはできないよ・・・これは戦争だからね」

少し考える雄二

「分かった、その条件を呑んでも良い」

九対九か・・・誰が出るかな

「ホント？嬉しいな」

ぐはっ！この笑顔は反則だろ

「だが、科目は選ばせてくれ、そのくらいのハンデはあってもいい
だろう？」

「え？うーん……」

悩むだろうな、こちらが有利すぎる

「……別にいいんじゃないの」

いきなり優子の肩に手が置かれた

「……赤城君」

……赤城？

「……学年4位の赤城慎吾」

ムツツリーニが教えてくれる

その男子はスプレー等で茶髪をセットしてあり赤いメガネを掛けて

いた

「どうもーっ 女の子大好き慎ちゃんであーす」

・・・何だろう、無性に殴りたい

「きのちゃんもお堅くならなくていいじゃないよー
ウチの代表もOKだしてるし」

「誰がきのちゃんよ！・・・って！代表！」

いつの間にか優子の隣に霧島がいた

「・・・雄二の提案を受けてもいい」

「あれ？代表、いいの？」

「・・・その代わり条件がある」

「条件？」

「・・・うん」

頷いて、霧島は雄二を見た後に姫路をチラッと見て、雄二に向かっ

て言い放つ

「……負けた方は何でも言うことを一つ聞く」

ふうん、何をお願いされるのかは分からないが面白い

「……代表う」

優子が溜め息混じりに言う

その優子の肩に手が置かれた

「……優子、あの代表には何を言っても無駄よ」

「さら……そうよね」

「あア？誰だア？」

一方通行が聞く

「……松本さら、学年3位の实力を持っている」

水色の霧島ぐらいある髪で穏やかな目をしている
スタイルは・・・察してくれ

「・・・なんでだろう、私今すぐ君を殴りたい」

松本が俺の方を見て言う

Why?

「交渉成立だな」

「ゆ、雄二！何を勝手に！まだ姫路さんが了承してないじゃないか
！」

あ、いつの間にか終わっていた

「・・・勝負はいつ？」

「そうだな、十時からでもいいか？」

「・・・わかった」

「じゃあ、きのちゃん帰りましょ」

「ちよっ、ちよっと！止めてよ！」

赤城が優子と肩を組むように教室に入っていく

「・・・・・・・・・・・・・・・・」

「・・・・・・・・り、龍也？」

ふう〜、と息を吐き出して俺は懐に手を差し込む

「・・・・・・・・雄二、朗報だ、Aクラス第四位が今日から旅に出るらしいぞ（ギューイイイイイイイイン！）」

俺は大型のチェーンソーを肩に担いでAクラスの扉を開けようと

「・・・・・・・・つて！待てえ！」

雄二と明久に止められる

「離せえ！」

「待て！殺人犯をウチのから出したくない！」

「っていつかどこからチエーンソーを！？」

それはあれだよ、企業秘密ってやつだよ

そのまま、俺はFクラスに引きずられて行った

君の心にジャストミーツウ！（後書き）

作「しまった！」

吉「遅い！」

上「さっさと終わってしまった！」

作「失礼！今日は一日三話投稿をするしかないので！失礼します！」

まだだ！まだ俺のバトルフェイズは終了してないぜ！（前書き）

前の話の最後を加筆しました

まだまだ！まだ俺のバトルフェイズは終了してないぜ！

「では、両名共準備は良いですか」

高橋先生の声が響く

「ああ」

「・・・問題ない」

今の俺等はAクラスにいる広いし、動きやすいからいいだろう

「それでは一人目の方、どうぞ」

「私が行きます」

向こうからは松本が来た
対するこちらは

「ワシがやるっ」

秀吉が出た

(うつむ、どの科目で行くかの?.....そうじ
や、英語が一番取れていた気がするのじゃ)

秀吉は少し考え、高橋先生に伝えた

「英語で頼むのじゃ」

「えっ!」

松本の顔が曇る

「では、始めます!」

「サモンじゃ」

「え、あ、ちよっ・・・さ、サモン!」

松本は焦りながら召喚する

秀吉は袴に薙刀、いつもの装備だ

対して、松本は水色を基調とした和風の甲冑に二本の機械的な槍、
うーむ強そうだ

英語

木下秀吉 68点

VS

松本さら 6点

・・・え？

秀吉の薙刀が松本の召喚獣を一閃し、一撃で終わった

「勝者！木下秀吉！」

「・・・英語は、ダメなの」

松本は膝を着いてorzの体勢になった

・・・うん、とりあえず

1 0だ、まずは優勢だな

「では、次の方どうぞ」

「僕が行くよーん」

赤城が出てきた

・・・ならば

「・・・俺が行く」

俺は前が出る

「・・・え!」

優子が声をあげる

「ま、待って!アタシが行く!」優子が前に出てきた

「木下さん、下がってください」

高橋先生が言う

「あ、えっと、その・・・」

「・・・チツ、明久、来い」

俺は明久を呼ぶ

「ん？何？」

明久が疑問に思いながらこっちに来る

「・・・高橋先生、二対二で戦っちゃダメですか？」

「・・・相手がよろしいのであれば」

「アタシはいいです」

「僕もいいよーん」

「・・・では、教科は？」

「・・・数学で」

俺はそう伝える

「・・・まずいな」

「ああ？何がだア？」

「木下優子も数学は得意だし、赤城に至ってはAクラスの最高得点保持者だ」

「雄二、ってことは」

「ああ、こちらが不利だ」

「では、両者、召喚してください」

「「サモン！」」

まず二人が召喚をする

優子は西洋の鎧に槍

赤城は崩した和服にアクセサリーを付けていて赤い太刀を持っていた

数学

木下優子 2 3 1 点
赤城慎吾 5 6 1 点

高いな・・・だが

「「サモン！」」

数学

木下優子 2 3 1 点

赤城慎吾 5 6 1 点

V S

黒崎龍也 7 4 6 点

吉井明久 1 2 2 点

俺等には勝てねえよ

まだまだ！まだ俺のバトルフェイズは終了してないぜ！（後書き）

作「・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・」

吉「・・・返事がない、ただのしかばねのようだ」

上「アレイズ！」

作「それ、FF！」

吉「あ、起きた」

作「・・・もういいや、重大発表！」

上「なんだ？」

作「年内にAクラス戦終了は無理ですので諦めます！」

吉「ええーッ！」

作「だが！ギリギリまで書くぜ！」

上「頑張っつて」

それでは！

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能たんのうしてください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n2842v/>

とある科学とテストと召喚獣

2011年12月29日17時52分発行